仮面ライダービルド　アナザーワールド

ラズベアー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エボルトを倒し、新世界を創造した仮面ライダービルド・桐生戦兎そして仮面ライダークローズ・万丈龍我

しかし、彼らは知らなかった。

新世界の裏で起こった、悲しくも美しいもう一つの出来事を

目次

本編
第1話 ―― 1
第2話 ―― 10
第3話 ―― 19
第4話 ―― 27
第5話 ―― 35
第6話 ―― 45
最終話 ―― 55
サイドストーリーズ
惣一の決意（第1話） ―― 65
Lの嫉妬／ツナ義ーズ絶好調（第5話） ―― 71
Lの嫉妬／ツナ義ーズ電撃解散（第5話） ―― 79
イマジンの戦い（第6話） ―― 85
エピローグ
破壊と創造 ―― 93
時の守護者 ―― 99
もう一つの新世界 ―― 104
Eの悪夢／Return of E ―― 113

本編

第1話

エボルトの脅威は去った。
地球にもたらされた、火星のオーパーツ・パンドラボックス。
地球外生命体・エボルトの手によって解放されたパンドラボックスは、巨大な壁「スカイウォール」を生み出し、この日本を東都・西都・北都の3つの都市に分断してしまった。
さらに、パンドラボックスの力でパンドラ・タワーも創られ、日本はおろか、地球まで消滅の危機に瀕していた。
でも、この世界の危機に4人の戦士が立ち上がった。
その名は、「仮面ライダー」
彼らは時に敵対し合い、時に手を取り合い、世界を救うため、エボルトに立ち向かっていた。
けれど、その仮面ライダーは今はいない。
それぞれ戦いの中で散り、または行方不明になってしまった。
彼らのお陰で世界の滅亡は阻止されたけど、崩壊してしまったこの世界に、どれだけの希望が残っているのか。それに、制御する者を失ったパンドラボックスからは、かつて仮面ライダー達が使っていたフルボトルの成分を元にしたスマッシュも生まれてしまった。
東都政府を中心とした新政府が歩兵型兵器ガーディアンを投入するも、それがいつまで持つか分からない。
「どうなっちゃうの…。助けてよ…。ねぇ、どこに行っちゃったの?」
「戦兎…、万丈…。」
石動美空は、戦士達が守り抜いた青空を見上げながら、こぼすように呟いた。
「政府官邸から、スカイウォールの残骸及びパンドラ・タワー近辺でスマッシュの活動が活発になっていると発表しました。これに対し、多数のガーディアンを投入しており、市民の皆さんの安全は守られてい

るとー」
「嘘ばっかり。」
海辺にたたずむカフェ・ｎａｓｃｉｔａ
先日退院した父・石動惣一と共に経営しており、ジャーナリスト・滝川紗羽もお手伝いで来ている。そこでテレビの報道を聞き、美空は大きなため息をついた。
「ほらほら美空ぁ、ため息ばっかりついてると、幸せが逃げちまうぞ。」
惣一はそう言い美空にコーヒーを淹れた。
「そんなわけないでしょ。」
美空はコーヒーを啜る。
美味しい。
やっぱり今目の前にいるのは、紛れもなくお父さんだ。
それだけでも、気持ちがほっとする。
美空は自然と微笑んだが紗羽に言われるまで気づかなかった。
「あ！美空ちゃん。やっぱり笑ってる方がかわいいわよ～。」
「え？笑ってなんかないよ。」
そう言われ、顔が熱くなっているのがわかった。
「でも…。」
美空はうつむいた。
「みんないたときの方が楽しかったなぁ…。」
美空の言葉に、紗羽は何と声を掛ければいいかわからなかった。
惣一も黙ってコーヒーメーカーの手入れを始めた。

しばらく沈黙が続いた後、ドアのベルが鳴った。
「まだやってるか？」
一人の男性がお店のドアをくぐってきた。
「え、お客さん？」
「うそ、お客さん？」
「マジで客か!?」
突然のことで、三人とも驚きを隠せなかった。
「いや、客以外来ることあるのか？」

お客さんと思われる男性は、三人の驚きように戸惑っていた。
「あ…。いや、どぉもどぉも！いらっしゃい!!」
「あ、えと…。な、何にいたしますか？」
惣一と紗羽はとりあえず接客を始めた。
「…。じゃあ、コーヒーを一つ。」
「かしこまりました！ほら、美空。突っ立ってないで席を案内して。」
「あ…。うん。どうぞ。」
美空は男性客をカウンターまで案内した。
珍しい。こんなところにお客さんだなんて。
今まで客足なんてほとんど、いや皆無と言っていいほどなかった。ましてや、色々な事情があったとはいえ、こんな海辺にお客なんてくること自体不思議でもあった。
でも、何だろう。
とても他人のように思えない、何とも言えない雰囲気を美空は彼から感じていた。
「…。何か付いてるのか？」
男性客の一言に美空は我に帰った。無意識の内にガン見してしまっていた。
「あ、ごめんなさい。何でもないです。」
「なら、いいんだが。」
そう言い、男性客はコーヒーを啜った。
「ん、悪くない。」
「そりゃあ、当店自慢のコーヒーですから！」
惣一は自信たっぷりに答えた。
「噂で、ここのコーヒーは飲めたもんじゃない不味さと聞いていたんだがな。」
「いやー、それは…。最近豆を変えてみたんだ。」
「そうか。」
男性客は特別興味がある様子ではなかった。
何この人、失礼な感じ。
美空は自分でもわかるほどムスッとした顔になった。

「他に客はいないんだな。」
「まぁ、こんな海辺でやってるってのもあるけど、このご時世、余程の用事でもない限り外に出るやつはいないだろうさ。」
「と、言うと？」
この男性客の一言に三人は違和感を覚えた。
「え、今起きてること、ご存知ないんですか？」
紗羽は尋ねた。
「いや…。ここに来たのもつい最近だからな。」
男性客は答えた。
「旅の人かい？」
惣一も尋ねると
「まぁ、そんなところだ。」
と男性客は答え、コーヒーを一口啜った。
「今はな、化け物がうろついてて危ないんだ。」
惣一はそう言い、今までこの国で起きていたことを簡単に男性客に伝えた。
「なるほど…。」
「あの、失礼ですけど、多分日本以外のお国でもそれなりに影響あったんじゃないですか？」
「…。多分な。」
紗羽の問いに答えるが、丸でその現象にあっていないように見えた。
美空は改めて男性客のことを観察した。
旅人というには手荷物を持たず身軽で、唯一見て分かるのは首から下げているトイカメラだけだ。
それに紗羽さんと同年代だと思うけどそれよりも少し老けて見える。疲れなのだろうか。でも目付きだけは鋭どく、どこか優しさも感じる。
何なんだろう、この人。
美空には違和感しか募らなかった。
「それで、その仮面ライダーってのは今はいないのか？」

「いないわ。」
美空が自分でも驚くほど瞬間的に答えていた。
「いたら…。いるのなら、こんな世界になってるわけないじゃない。」
何故かわからない。何とも言えない悲しみが膨れ上がり、美空の目から涙が流れていた。
「美空…。ちょっと疲れたんだろう。部屋で休んでなさい。」
答える前に美空は部屋へ向かった。
「ん、そっちは冷蔵庫じゃないのか。」
「そういう…。デザインの扉なの。」
紗羽が答えた。
「そ、そうか。」
男性客は不思議に思っただろう。
「あー、申し訳ないね。あいつ、美空は俺の娘なんだけど、看板娘にしちゃあ無愛想で。」
「いや…。」
「だが、大体わかった。コーヒー旨かった。娘さんにもよろしく言ってくれ。」
そう言い男性客は席を立った。
「これからどちらへ？観光といってもこの辺じゃあ観るものなんてないですよ。」
「そうだな…。そのパンドラ・タワーとやらを拝みにでも行くかな。」
男性客のその一言に、惣一は慌てて言った。
「お客さん、悪いことは言わない。あそこにだけは近づかない方がいいぞ。」
「ご忠告、どうも。」
男性客は扉の外へ出て行った。
「何なんだろな、今の客。」
惣一は、紗羽に聞いた。
「さぁ…。でも、何だか他人には思えない…。何だろ、うまく言い表せないんだけど…。」
「紗羽さんも？実は俺も思ってたんだ。あいつに似てるなって。」

そう。美空が感じていた違和感は紗羽も惣一も感じていたのだった。

美空はベッドの上で目を覚ました。

どれくらい寝ていただろうか。枕はしっとりと湿っていることから、寝る直前まで泣いていたのだろう。

重い瞼をこすりながらも、先ほどの男性客のことを考えていた。

今どこで何をしてるのだろう。

そう思った瞬間、美空は立ち上りそのまま店の外まで出て行った。

辺りはすっかり暗くなっていた。只でさえ人気の無くなった街が闇夜も相まって一層静かで不気味さを増していた。美空はまっすぐにパンドラ・タワーを目指していた。

多分、あの人はそこにいる。

根拠などないが、美空には彼がパンドラ・タワーにいると確信を持っていた。

パンドラ・タワーの近くについた時、回りの空気が変わったことに美空は気づいた。

「ヴゥゥゥ…。」

暗闇から、三体の怪物・スマッシュが現れた。それはかつて仮面ライダー達がボトルとして使っていた成分をモチーフにした姿だった。

「助けて。」

美空はその場で腰が抜けてしまった。

「助けて…、戦兎！」

祈るように呟いた。

桐生戦兎。仮面ライダービルドがすでにいないことはわかっていたのに。

「ヴァアアアア!!」

一体のスマッシュが襲いかかろうとしたとき、横から人影が飛んでいき、身体でスマッシュを突き飛ばした。

「大丈夫か、美空！」

そこにいたのは惣一だった。

「お父さん、どうして。」
「それはこっちの台詞だ。なんだってこんなとこに来たんだ。夜な夜な外に出ていくお前を見て追っかけてきたらこれだ。」
「お父さん、早く逃げよう！」
「いや、こう囲まれたら無理だ。」
「そんな。」
　確かに、スマッシュ達は少しずつだがこちらと距離を詰めていた。
「美空…。俺が何とかするから、お前だけでも逃げろ！」
「そんな無理だよ、お父さん！」
「いや、無理じゃない。俺にはこれがある。」
　美空は惣一の手元にあるものに気づいた。
「お父さん!?何で？」
「黙ってて悪かったな。」
　そう言うと惣一は左手に持ったフルボトルを降り、右手のピストルのようなものに装着した。
「蒸血！」
　コブラ…コ、コブラ…
　ファイア!!
　ピストル型のデバイス・トランスチームガンから吹き出した黒煙が惣一の身体を包み込み、爆炎と共に、美空の目の前には見覚えのある姿があった。
「ブラッド…、スターク…？」
　かつて仮面ライダー達に敵対した怪人。惣一はそれを身に纏うと、スマッシュに攻撃をしかけていた。
「お父さん！どうして。」
「仮面ライダーが消えた。いや、戦兎を消してしまったのは、俺の責任だ。」
「違う！あれはエボルトが…。」
「あぁ。だが、俺の身体を使ってこの星を消そうとしたんだ。それに俺が火星からあんなものを持ち出さなきゃこうはならなかっただろ。」

ブラッド・スタークとなった惣一は続けて言った。
「俺はなぁ。意識はあっても何もできなかった自分が許せなかった。だから、せめて俺がこの国を守る。そう決めたんだっ!!」
トランスチームガン・ライフルモードでスマッシュを一体撃破した。
しかし、残りのスマッシュを相手にスタークも徐々に追い詰められていた。
「何してんだ。早く逃げろ、美空!!」
「嫌だよ、お父さん。もう一人にしないで!!」
「うわぁぁ!!」
ついにスマッシュの猛攻に耐えきれず、スタークは惣一の姿に戻ってしまった。
「み…、美空…。」
「お父さん!!」
その時だった、銃声とともに近づいていたスマッシュ達が退いていた。
「何…?」
「っ!あなたは。」
彼らの目には、昼間現れた男性客の姿があった。
「あんた…。やっぱりここに、いたのか…。早く、逃げろ…。」
しかし、男性客は逃げる素振りを見せない。
「全く…。こんなところでも除け者扱いか。ま、慣れてはいるがな!」
「え?」
彼の手には何かカードのようなものがあり、腰にはビルドドライバーに似ているベルトを身につけていた。
「お前は…。いったい…。」
惣一は男性客に問い掛けた。
「通りすがりの、仮面ライダーだ。覚えておけ。」
「変身!」
カメンライド・ディケイド!!
ベルトにカードを装填すると、いくつもの鎧の幻影が彼の身体を包

み込み、無数の赤いカードのホログラムが顔へまとわりついた。
そこにいたのは、かつて美空達が見てきた仮面ライダーだった。
「仮面ライダー？」
「ディケイドだ。いくぞ！」
ディケイドと名乗る仮面ライダーはスマッシュへ攻撃をしかけた。
カードを次々とベルトへ装填し攻撃を加えていく。
その姿はまるで、仮面ライダービルドがフルボトルを換えながら戦う様だった。
ファイナルアタックライド
ＤＤＤディケイド！
「はあああああ!!!!」
ディケイドの飛び蹴りが一体のスマッシュの身体を突き抜け、スマッシュは爆散した。
「逃がすか。」
逃げようとするスマッシュを横目に、またカードを装填する。
カメンライド・剣!!
「姿が変わった？」
先ほどのマゼンタカラーの姿から一変し、剣を携えた群青色の姿に変わった。
ファイナルアタックライド
ＢＢＢ剣!!
切っ先に集めたエネルギーを光刃にかえ、斬撃波をスマッシュへ放つ。それはスマッシュを切り裂き撃破した。
「ひとまず、さっきの喫茶店に戻るんでいいな。」
ディケイドの姿から元に戻った男性客は石動親子へ聞いた。彼らは黙って頷き、男性客とともにｎａｓｃｉｔａへ帰った。

第2話

「大丈夫かしら…。」
突然店を飛び出した美空を惣一追いかけて行った。それから一時間近く経っていて、紗羽は心配していた。
カランカラン
扉のベルがなり、美空と傷だらけの惣一、そして惣一を担いで昼間の男性客が入ってきた。
「っ!?どうしたのその身体!」
紗羽は男性客から惣一の身体を預かり、近くのイスに座らせると、急いで救急箱を取りに行き治療を始めた。
「まさか、あんたが仮面ライダーだったとはなぁ。」
紗羽の治療を受けながら惣一は男性客に言った。
男性客はまた黙ってコーヒーを啜った。
「あなたのお名前は?」
紗羽が聞くと
「門矢士だ。」
男性客は答えた。
「門矢士さん。仮面ライダーディケイド。」
美空は繰り返して言った。
「あぁ。」
「でも、私達の知ってる仮面ライダーと少し違う。」
美空が呟くと士は答えた。
「だろうな。俺はこの世界の住人じゃない。」
「どういうことだ?」
惣一が聞き返した。
「俺は、数々の仮面ライダーの世界を渡り歩きながら旅をしていたんだ。」
「じゃあ、他にも仮面ライダーがいる世界があるというの?」
紗羽が尋ねた。
「あぁ。それでここ”ビルドの世界”にたどり着いたという訳だ。」

仮面ライダーの世界がいくつもある。にわかには信じられない発言だったが、目の前にいる士という男も現にビルド達とは異なるライダーである時点で納得せざるを得なかった。
「だが、どういう訳かここには仮面ライダーが存在しない。不思議に思ってパンドラ・タワーを調べようとしたら。」
「…。俺たちがいたということか。」
「そういうことだ。」
「俺がライダーの世界にたどり着くとき。そこには俺がやらなきゃならない使命がある。」
「その、使命って？」
紗羽が尋ねる。
「それは…。」
三人は固唾を飲んで聞いていた。しかし。
「知らん。」
一瞬の間があいた。
「…。え？」
「俺にもここにどんな役割で来たか分からない。」
「え、何それ。どういうこと？」
先ほどの士の一言で、美空は一気に胡散臭さを感じた。
「あんた、数々の仮面ライダーの世界を旅するって言ってて何も目的がなくてやってるの？」
美空は士に食って掛かった。
「まぁ…。そういうことになるな。」
「え、は。え？じゃあ何しに来たの？」
「だから知らないと言っただろ。」
「すごいこと言ってると思ったら目的も無しにフラフラしてるって訳!?あり得ないんだけど！」
「み、美空、ちゃん？」
紗羽が引き気味に声を掛けるが、美空は止まらなかった。
「な、何だよさっきから。」
「ラブ＆ピースのために戦ってるんじゃないの？」

「ら、らぶ…？」
　士は困惑した。
「はぁ。呆れた。仮面ライダーなら戦兎達みたいにラブ＆ピースのために戦ってると思ったのに、ただのちゃらんぽらんライダーだったなんて。」
「おい、黙って聞いていれば好き勝手いいやがって。」
　士はムッとした。
「美空ちゃん、でもほら、アイドルのために戦うライダーもいたでしょ。」
「何？」
「かずみんのことはいいの！はぁ、もう疲れたし、だるいし、寝るし。」
　美空はそう言うと、冷蔵庫の奥へ消えて行った。
「だから、何で冷蔵庫なんだよ。」
「それは、知らない方がいいわ…。」
　紗羽が意味ありげに言い、士もそれ以上は追及しなかった。
「士君。悪く思わないでやってくれ。あいつなりに仮面ライダーに対する想いがあって、ああ言ったんだ。」
　惣一は言った。
「アイドルのために戦うことか？」
「そこかよ。違う違う。」
「ラブ＆ピースのことだ。この世界のライダー達はそれを胸に秘めて戦ってきたんだ。」
「…。」
　士は少し考えごとをしているようだった。しばらくして口を開いた。
「少なくとも、ここでの俺の役割が分かるまではこの世界を離れられない。しばらくここに住まわしてくれないか。」
　惣一もしばらく黙ったが。
「…、いいだろう。以前戦兎が使ってた部屋があるから好きに使ってくれ。」
「助かる。」

「ただし、娘に手は出すなよ。あれでも俺の大切な愛娘なんだからな。」
「誰が手を出すかあんな女。」
「何？俺の娘に手が出せないだと!?」
「そこかよ。食いつくの。」
「あいつはみんなのアイドルなんだぞ。手が出したくてしょうがない存在なんだぞ！」
「何言ってんだ。」
「惣一さん。それ以上はやめてください。」
　気がつくと紗羽が殺意のある目で土と惣一を見ていた。
「あ、すまん。えーっと、じゃあおやすみ土君。ちゃお」
「あ、あぁ。」

　翌朝。美空が店のホールへ出ると土が出かける支度をしていた。
「どこに行くの？」
「昨日も言ったハズだ。パンドラ・タワーに向かう。」
　土は美空と目を合わせずに答えた。
「そこに行けば何か分かるの？」
　美空が尋ねるも
「知らん。」
　と呆気なく答えられてしまった。
「またそれ。ほんと使えない。」
「何だよ。何でお前にそんなこと言われなきゃ行けないんだ？」
　土はそういうとバイクに跨がった。
「ねぇ、待って。」
　美空は土を呼び止めた。
「今度は何だ。」
　土は面倒臭そうにしていた。
「私も…、私も連れて行って。」
　土はじっと美空のことを見つめた。
「何故だ。」

「そこに行けば、戦兎達のこと、どこにいるのか分かるかもしれないから。」
「確証はあるのか？」
「それは…。」
　美空は次の言葉が見つからなかった。
「まぁいい。俺もこの世界のライダーについて知りたかったからな。乗れ。」
　そう言い、士は美空に予備のヘルメットを渡した。
　二人はバイクに乗り、パンドラ・タワーを目指した。
「で、この世界のライダーってのはどんなやつらだったんだ？」
　バイクに乗りながら士は聞いた。
「この世界には6人の仮面ライダーがいたの。」
「仮面ライダーローグ。ワニの仮面ライダーよ。」
「ワニか。珍しいな。」
「東都政府首相の息子、氷室幻徳が変身してたわ。かつてはパンドラボックスの影響で悪の組織ファウストのボスだったの。それがある切っ掛けから仮面ライダーになって国をまとめて平和を目指すために戦ってたの。」
「なるほどな。悪から正義に目覚めるライダーもよくいるものさ。」
「でもね、彼私服のセンスが壊滅的なの。」
「は？」
「ほんっとにダサくて。ようやくライダース着てマシになったと思ったら、アンダーのシャツに言葉を印刷したもの着ていて、それで会話するようになっちゃって。笑」
「何だその情報は…。」
「次は仮面ライダーグリス。ロボットの力を使う仮面ライダーよ。」
「北都の大地主、猿渡一海が変身してたの。農業で他の仲間も養っていたんだけど、スカイウォールのせいでそうもいかなくなってしまって…。それでライダーとして戦うようになったの。」
「ほう。」
「ただ…。けっこうイケメンなんだけど、アイドルオタクなの。」

「何!?」
「実は私、ネットアイドルのみーたん♪やっててて、彼はその強烈なファンだったの。」
「み、みーたん？お前みたいなのがアイドルなのか。」
「何か言った？」
「いや…。」
「仮面ライダーエボル。エボルトが変身してたけど、こいつが世界をこんなにしちゃったの。」
「元凶ということか。」
「うん。地球外生命体で、仮面ライダーの大元ね。」
「地球外生命体…。」
「人に乗り移りながら暗躍してて、実は私のお父さんに擬態してたの。」
「ちょっと待て。お前の親父が元凶だと!?」
「あっちは本物のお父さんっ」
「星を飲み込むことができるほどの凶悪な仮面ライダーだったの。」
「それを戦兎とやらが倒したのか。」
「…。うん。」
「あ、内海さんも仮面ライダーマッドローグだった。」
「二人目のローグか。」
「ちょっと違うけど。仮面ライダーエボルと同じベルトで変身する、コウモリのライダー。エボルトについてたんだけど、実はエボルトを倒すためにスパイをしてたんだ。」
「肝の座ったやつだったんだな。」
「サイボーグだもの。」
「へ？」
「サイボーグだもの。」
「…。（この世界のライダーはどうなってんだ…。）」
「エボルトといえば…、仮面ライダーブラッドというライダーもいたわ。コブラとドラゴンのライダーだったかな。」
「その口振りだと、エボルトの仲間か。」

「そうみたいなんだけど、ブラッドはエボルトとは別で地球を滅亡させようとしたの。」
「つくづく迷惑な奴らなんだな。それで？」
「えー…と。それだけ。」
「え？」
「実は、ブラッドは国民を洗脳する力を持ってて、私もその影響を受けていたの。だから、洗脳されてる間は記憶が曖昧というか…。」
「そうか。」
「あ、でもスクリーン限ｔ」
「わかった、それ以上言うな。」
「万丈龍我。仮面ライダークローズに変身するドラゴンのライダー。」
「ドラゴンか。似たやつを知っている。」
「エボルトの遺伝子を持った筋肉バカよ。好物はプロテイン。」
「また変なやつが仮面ライダーなのか。」
「元々格闘家だったんだけど、冤罪で捕まってて脱獄した所を戦兎に救われたの。」
「でも強いし、戦兎のことを気にかけてて良いやつだったな。」
「そして、仮面ライダービルド。桐生戦兎が変身する兎と戦車のライダーよ。」
「…。とりあえず続けてくれ。」
「二本のフルボトルを組み合わせて色々な力で敵と戦ってきたの。」
「なるほど。」
「戦兎は自称天才物理学者で、自分でライダーのアイテムを作っていたの。ちょっとナルシストな所もあったけど、誰よりも愛と平和を信じて戦ってたわ。」
「ラブ＆ピースってやつか…。会ってみたかったな。桐生戦兎ってやつに。」
「でも戦兎は、ほんとは桐生戦兎じゃないの。」
「え。」
「ほんとは葛城巧っていうライダーシステムを創り上げた天才。ううん悪魔の科学者だったの。それがエボルトの手によって顔と記憶を

変えられてしまったの。今の顔はツナ義ーズ佐藤太郎なの。」
「ん。…んん??佐藤太郎で葛城巧で桐生戦兎なのか？」
「そう。」
「というか、設定が複雑すぎて頭に入ってこないんだが。」
「じゃあそういうあなたは、どんな人なのよ。」
「通りすがりの仮面ライダーで、大ショッカーの大首領だ。」
「…なんて？」
「…。気にするな。」
「え、ごめん。何？大何とかの大首領？本気で言ってる？」
「もういいだろ。」
「すごい気になるんですけど。」
「いいから。俺に質問するな。ほら着いたぞ。」
パンドラ・タワーに近づくとスマッシュが何体も待ち構えていた。
中には夕べ倒したはずの個体もいた。
「昨日倒したやつもいるだと。」
「アイツらはただ倒したんじゃだめ。フルボトルに成分抜き取らないとまた復活するの。」
「それを先に言え!!」
「でも倒してすぐにって訳じゃないから。」
「突破自体は出来るのか。離れてろ。変身!!」
ディケイドとなってスマッシュに立ち向かう。
その姿はやはり仮面ライダービルドと重なって見えた。
カードを装填しながら戦うもまだ数はあった。
「なら、こいつでどうだ。」
カメンライド・龍騎！
ディケイドの姿が赤い身体に鎧をまとった姿に変わった。
「え。」
頭部の意匠に龍が象られていた。
アタックライド・アドベント
どこからともなく赤い龍が現れ、火球を吐きながら次々と敵を蹴散らして行く。

ファイナルアタックライド
ＲＲＲ龍騎！
「はあああああ!!!!」
龍の火球を纏いながら、最後の一体に飛び蹴りを放った。
「この中はどうなってるか分かるか。」
変身を解いた士は美空に尋ねた。
「頂上が広場になっていて、そこにパンドラボックスがあるはず。」
「よし、行くか。」
中へ入ろうとしたとき、上空から何かが飛んできた。
「え、何？」
それは丸でサーフボードのようなものだった。
「アギト・トルネイダー？何故こんなところに。」
士はそれが何なのか知っているようだ。
「…。美空、これに乗って一気に上まで行くぞ。」
「え、大丈夫なの？」
士は答える間もなく美空を担ぎ、アギト・トルネイダーに乗った。
「きゃあああああああ!!」
一気に上昇して行き、美空は叫んでしまった。
しかし、あっという間にパンドラ・タワーの頂上に到着した。
そこにはパンドラボックスと一人の人影があった。

第3話

パンドラ・タワー頂上。
そこには中心に祭壇の様な朽ちた石碑があり、芝生が生える地面は所々はげ、地肌を晒していた。
そして、中心の祭壇に岩とも鉄とも言えない素材で出来た四角い箱の様なものが置かれていた。
アギト・トルネイダーから降りると、それはパンドラボックスの隣にいる男の側で仮面ライダーの姿となり、間もなく霞むように消えて行った。
「やっぱりお前か、海東。」
「やぁ、士。君なら気付くと思ったよ。」
海東と呼ばれた男が答えた。
「士さんの知り合い？」
「海東大樹。初めまして、お嬢さん。」
海東は美空に挨拶した。
「やつも仮面ライダーだ。仮面ライダーディエンド。俺と同じ世界のライダーだ。」
「え、てことは。彼も大何とかの大首領？」
クスッと笑いながら美空は言った。
「お前バカにするのも大概にしろよ。」
思わず士も口を出した。
そのやり取りを見ていた海東は、フンと鼻で笑う。
「まさか、彼と一緒にしないでくれたまえ。僕はただの」
「盗っ人だろ。」
士が先に答えた。
「ドロボウライダー!?」
美空は少し引いた。
「人聞きの悪い。僕は訪れた世界のお宝をもらいに来ただけさ。」
美空は少し考えた。
「え、この世界のお宝って…。」

「そう、このパンドラボックスさ。」
　そう答えた海東の気味の悪い笑みに美空は悪寒を感じた。隣で士も身構えていた。
「毎度毎度何か企んでいたが、こればかりは止めておいた方がいいぞ、海東。」
　士は言った。
「珍しいねぇ。君が僕に忠告するなんて。」
　海東は飄々としていた。
「それが、この世界をこんなにしちゃった元凶なのよ。触ったりでもしたらどうなるか。」
　美空も言った。
「知っているさ。この世界で起こったことも。これから起きようとしていることも。」
「何のこと？」
「あれ。士から聞いてないのかい？」
　海東は意味あり気に言い、続けて言った。
「この世界は、いずれ消滅するよ。」
　美空は海東の言っている意味がわからなかった。
「どういうこと？士。」
「…。」
　士は黙っていたが、重い口を開けて言った。
「この世界に仮面ライダーがいないのならば、この世界は消えてしまう。」
「…え。」
　士の言っている意味もわからなかった。
「簡単な話さ。」
　海東が口を開いた。
「ライダーの世界。それはその世界の中心となるライダーがいて初めて成立するんだ。」
「ここ”ビルドの世界”も仮面ライダービルドが存在していたことで成り立っていたということさ。」

美空は少しずつだが理解してきた。
「でも、ビルドは…。」
「この世からいなくなった。故に世界の崩壊が進んでいる。」
士が言った。
「パンドラボックスからスマッシュが溢れ出ているのは、世界を崩壊させるため。世界の摂理に則った必然ということさ。」
海東も続けて言った。
「そんな…。」
美空はその場で膝をついてしまった。
「待ってよ…。エボルトもいなくなって戦兎達が犠牲になって平和を取り戻したのに。結局世界は滅亡しちゃうの?」
「…。」
士は黙って美空を見つめていた。
「それじゃあ、戦兎の闘いは無駄だったってこと?万丈もかずみんも幻徳も何のために戦ってたの…。」
美空の目から涙が止まらなかった。
「つまり、お宝だったパンドラボックスから際限なくスマッシュを生み出し続けてるんじゃ、こんなものはいらないよ。士、君も早くこの世界から立ち去った方がいい。」
「俺たちをここへ連れてきたのは、わざわざそれを伝える為にか。」
「さぁ。何のことかな。」
海東はシラを切るように言い、その場から立ち去ろうとしていた。
結局、世界が滅びるのは変わらなかった。その事実を突き付けられ、美空は絶望していた。
「待て、海東。」
士が言った。
「俺は、ビルド達仮面ライダーが消えた後にこの世界に訪れた。俺には、この世界を何とかしなくちゃいけない役割があるはずなんだ。」
美空は大粒の涙を流しながら、士を見上げた。
「確かに、君は世界を渡る中でそれぞれ役割を与えられていたね。でも、今回ばかりはどうだろうね。」

しかし、士も返す言葉が見つからなかった。
すると、どこからともなくスマッシュが何体も現れた。
「またか。」
「待ちたまえ、士。」
海東が変身を抑制した。
スマッシュの中から人影が現れた。
「さっきから聞いていれば。世界が崩壊するだと。馬鹿馬鹿しい。」
男は言った。
「確かにスマッシュを野放しにすれば経済は破綻するだろう。しかし、スマッシュを含めパンドラボックスさえ制御してしまえば、どうということはない。」
「貴様、何者だ。」
士は男に聞いた。
「失礼、自己紹介が遅れたな。私の名は御堂光明。」
御堂。それは美空にとって聞いたことのある名だった。
「御堂って、西都の御堂首領の…。」
「そう、息子だ。」
美空の言葉に続けて御堂は言った。
「そして、またの名を。」
そう言いながら、右手に持ったトランスチームガンに酷似したネビュラスチームガンにフルボトルを装填した。
「蒸血!」
スパイダー…。ス、スパイダー。
フィーバー!!
黒煙が御堂を包みこみ、蜘蛛の姿をした怪人となって現れた。
「アシッド・ハンター。ネオファウストの首魁だ。」
「ネオファウストだと?」
士と海東は身構えた。
「ファウストの意思を継ぎ、新たな世界の王となるための組織だ。」
「スマッシュを駒として制御し、残された人類を支配する。かつて親父が成し得なかった世界の統一。今こそ、この光明が成してみせる。」

「しかし、それには仮面ライダーが至極邪魔でねぇ。せっかく消えたのだ。君たちにも退場願おうか。」
御堂の言葉の後にスマッシュ達の血の気が立ったことがわかった。
「生憎だが、俺にはここでやらなきゃならないことがある。それが分かるまでは、ここを離れるつもりはない。」
士は一歩も引かない。
「別にこの世界が滅びようが支配されようがどうでもいい。けど、パンドラボックスを制御できるというなら、ぜひ教えて貰いたいものだね。」
海東も言葉は悪いが引かないようだ。
御堂は肩を落とした。
「残念だ。異世界のライダー諸君。私は親父と違って心が広い方だと思っているが、邪魔をするなら消えて貰おう。行けっ」
御堂の言葉を合図にスマッシュ達が迫ってきた。
「行くぞ海東。」
「僕に命令しないでくれたまえ、士」
そう言うと、二人は同時にカードを構えた。
「「変身!!」」
海東は手に持った銃にカードを装填した。
カメンライド・ディエンド!!
ディケイドと同じく、鎧の幻影が海東を包み込み青いカードが顔にまとわりつき、仮面ライダーディエンドに変身した。
二人の仮面ライダーは果敢にスマッシュへ立ち向かっていく。
カメンライド・キバ!!
ディケイドはカードを装填すると、赤いコウモリのライダーに変身した。
「なるほど、じゃあ僕はこれを使おう。」
海東は二枚のカードを手に取り、銃に装填した。
カメンライド・イクサ（セーブモード）!!
カメンライド・ダークキバ!!
銃から二体の仮面ライダーが召喚された。

一体は白い鎧を身にまとっており、もう一体は黒い鎧のコウモリのライダーだ。
「この俺が子猫ちゃんのためにお手本を見せてやる。」
「力を借りるぞ、蝙蝠擬き…。」
二人のライダーの声を聞いて、美空はハッとした。
「え、今のは…。」
いや、聞き違いだろう。美空はそう思うことにした。
4人のライダーがスマッシュを撃破していく。
「なるほど…。思ったよりやるじゃないか。しかし、切り札はある。」
ハンターは新たに二体のスマッシュを呼び出した。
「っ!あれは…。」
美空はそのスマッシュを凝視した。
兎を模したラビットスマッシュと戦車の意匠があるタンクスマッシュだ。
それはかつてビルドが基本フォームとして使ったフルボトルの成分から産み出されたものだった。
イクサとダークキバがそれぞれのスマッシュへ仕掛ける。しかし、ラビットスマッシュは目にも止まらぬ速さでライダーを翻弄し、片やタンクスマッシュは攻撃を物ともせず、重い一撃を与えていく。
とうとう、ディエンドが召喚したライダー達は消えてしまった。
「いかがかな、ライダー諸君。我が傑作。ラビットスマッシュとタンクスマッシュの性能は。」
ハンターは声高に言った。
「どうしてスマッシュを操れるの!?」
美空は叫ぶようにハンターに聞いた。
「その為のデータがあるのでな。このパンドラ・タワーに。」
ハンターは答えた。
「こいつは厄介だな。」
士は呟いた。
「正攻法は効かなそうだね。」
海東も構えるが息が上がっていた。

「海東、一瞬だけあの二体の動きを止められるか。」
「何する気だい、士。」
「真ん中の蜘蛛男。やつが司令塔ならば先に潰す。」
「見物だね、やってみたまえ!!」
　二人の連携攻撃で二体のスマッシュは動きを止めた。その隙にディケイドはアシッド・ハンターに攻撃を仕掛けた。
「確かにそれは正しい選択だ。しかし、私が君たちより強いということは計算に入っているかな？」
　ディケイドの攻撃を意図も簡単にかわし、一方で正確な一撃をディケイドの与えていく。
「うわぁ!!」
　思わぬ反撃をくらいディケイドは膝をついてしまった。
「くぅ!!」
　ディエンドも二体のスマッシュに攻撃され、突き飛ばされてしまった。
「士さん、海東さん!!」
　圧倒的な強さを前に美空は恐怖を感じていた。
「これで終わりです。さらばライダー諸君。」
　ラビットスマッシュとタンクスマッシュがそれぞれエネルギーを溜めている。今にも止めをさそうとしているが、避けようにも身体のダメージが酷く言うことを効かない。
　インビジブルで避けられるが美空までは助けられない。
　見捨てるしかないのか。
　士がそう思った時だった。
　フォーーーーーン。
　どこからか電車の汽笛が聴こえてきた。
「え、電車？」
　しかしここは地上より遥かに上空に位置している。電車の音など聞こえるはずがなかった。
　しかし、空から突然電車が現れた。
　そこから、三人の人影がスマッシュとハンター目掛け飛んできた。

とっさのことで、スマッシュとハンターは攻撃を止めて退いた。
「何者だ？」
そこには赤、緑、青色の三人の仮面ライダーがいた。
「はぁ？てめぇ、俺のこと知らないのかよ。」
「そりゃそうだよ。ここには初めて来たでしょ。」
「いいから、こいつら拾ってさっさと行くぞ。」
士には見覚えがあった。
「仮面ライダー、ＮＥＷ電王、ゼロノス、それとモモタロスか。」
思わぬ増援に戸惑いながらも安堵した。
「な、ディケイド！俺だけ何で本名なんだよ！電王だ電王!!」
「で、電王？」
美空には何がなんだか分からなかった。
「ディケイド、ディエンド。とにかく、一度デンライナーに乗って。」
ＮＥＷ電王と呼ばれる青いライダーが言った。
「そうするしかないようだね。」
ディエンドは何とか立ち上がった。
「美空、お前も乗るぞ。」
「ちょっと待って！」
答える前にまた担がれ電車に乗った。
ライダー達を乗せると、電車は空へ走り時空間へ飛び込んでいった。

第４話

さっきまでパンドラ・タワーにいたはずなのに、今は電車の中にいる。状況が飲み込めないうえに、化け物が７人も美空の顔を覗きこんでいた。

「なんだか、コハナクソとおんなじ匂いがするなぁ。」

赤い化け物が言った。

「こらこら、センパイ。それはコハナちゃんに対してもこのレディに対しても失礼でしょ。」

青い化け物が言った。

「気の強い女子は嫌いやないで！」

黄色の化け物が言った。

「ねぇねぇ！一緒にお絵かきしようよ♪」

紫の化け物が言った。

「しかし無事で良かった。あ、侑斗をよろしく！」

緑の化け物から飴をもらった。

「君がネットアイドルのみーたんこと、石動美空君だね。よろしく。」

群青色の化け物が言った。

「ふむ…。姫ほどではないが美しい女性だ。側にいてもいいのだぞ。」

白い化け物が言った。

「士さ～ん、どうなってるのこれ…。」

美空は泣いていいのか叫んでいいのか分からなかった。

「心配するな。そいつらはイマジンという化け物だが人に危害を加えたりはしない。」

「仮面ライダー電王の愉快な仲間達くらいの認識でいいさ。」

士と海東は気にも止めていなかった。

車内のドアが開き、奥から二人の青年が現れた。

「驚かしてごめんね。でも無事で良かった。僕は野上幸太郎。仮面ライダーＮＥＷ電王。よろしくね。」

「桜井侑斗。仮面ライダーゼロノスだ。」

「あ、あの侑斗さん。アメご馳走さまです…。」

「ん…？あ、おい！デネブ！また勝手なことしやがって!!」
桜井侑斗と名乗る青年はデネブと呼ぶ緑の化け物にいきなり関節技を仕掛けに行った。
「僕たちは時の運行を守る仮面ライダーなんだ。」
「時の運行？」
美空は幸太郎に聞き返した。
「簡単に言うと、大きな歴史の改変を阻止するために仮面ライダーとして戦っているんだ。」
「そ、そんなことができるの？」
美空には信じられなかった。
「僕たちイマジンは過去の世界に飛んで悪さすることができるからね。その悪いイマジン達を僕たちが懲らしめてるって訳。」
青い化け物が丁寧に教えてくれた。
「だが、その電王達が何でビルドの世界にきたんだ？」
士は幸太郎に聞いた。
「それは、私がお答え致しましょう。」
車内ドアの奥から恰幅のいい男性が現れた。
「初めまして。私、このデンライナーのオーナーです。」
オーナーを名乗る男はそのまま続けて言った。
「我々があの世界に行った理由は、あなたの行動を止めるためです。門矢士さん。」
「どういう意味だ。」
士が問い返した。
「士さん。あなた、あの世界を崩壊から守ろうとしてますね？」
「…。」
士は黙って聞いていた。
「それが問題なんだ。」
侑斗が壁にもたれながら言った。
「え…。それって私の世界を崩壊させるってこと？」
美空が恐る恐る聞いた。
「ま、平たくいうとそう言うことなんですがねぇ。」

オーナーはさらりと言った。
「まぁ、まずは、事の経緯をお話しましょう。」
「その前に、コーヒーでも飲みながらにしましょ♪」
アテンダントと思われる女の人がみんな（イマジンを含む）の分のコーヒー（と思われる飲み物）を振る舞った。
「わーい、いただきまーす♪」
イマジン達は美味しそうにそれを口にしていた。
「ありがとーう、ナオミちゃん。」
オーナーもそう言うが一口も口にしようとしなかった。人間のみんなも同じようだったが、侑斗だけは平然と飲んでいた。
「さて、一息着いた所で、お話しましょう。」
「実は、あなたのお仲間、桐生戦兎君は、新世界の創造に成功致しました。」
オーナーの言葉に美空は自分の耳を疑った。
「え、本当なんですか？」
「えぇ。そこで桐生戦兎君、それと万丈龍我君でしたね。彼も一緒に過ごしていますよ。」
「…よかったぁ。」
美空は今にも泣きそうになった。
「しかし…、それが今回の問題を生み出してしまったのです。」
オーナーは淡々と言った。
「どういうことだ。」
士が聞いた。
「平行世界との融合。正確には成功していないんです。」
「え？」
「仮にスカイウォールのある世界をＡ世界。平行世界をＢ世界としましょう。葛城忍という科学者が立てた理論なら、Ａ世界とＢ世界が融合しＣ世界として新世界が成立するはずでした。」
「しかし、そこでキーとなるエボルトの存在。これがまた予期せぬ結果をもたらしてしまったのです。」
「予期せぬ結果？」

美空は聞き返した。
「えぇ。世界の融合のためのエネルギーとなるエボルトも意思の持つ生命体。もちろん反抗する訳です。エボルトが最期の最後まで反抗したことでA世界とB世界は完全に融合することができなかった訳です。」
「結果から申しますと、A世界とB　世界が融合したC世界ではなく、A世界をB世界にアップデートしてC世界が生まれてしまったのです。」
車内の雰囲気は理解に難しいのか静まりかえっていた。オーナーは咳払いをして続けた。
「つまりB世界だけがC世界へと変わり、A世界とC世界が平行世界として存在することになってしまったという訳です。」
「なるほどね。」
海東が頷いた。
「そして、そのアップデートされたC世界に仮面ライダービルドこと桐生戦兎が辿り着いたということです。」
ここにきて士はハッとした。
「つまり、そういうことなのか。」
「えぇ、そういうことなのです。」
「どういうことなの？わからないんだけど。」
美空は士に尋ねた。
「本来、B世界にはライダーは存在しなかった。そもそも最初からライダーが存在しない世界なら何も起きない。しかしC世界となってそこに仮面ライダービルドがいることになると、C世界が”新たなビルドの世界”になるんだ。」
士は言った。
「そうなると、どういうことになるのかというと我々ライダーの時間のレールはビルドのいないA世界からビルドのいるC世界へ切り替わる。そうすることで時間の流れを安定させようとします。」
オーナーが続けた。
「ライダー世界の本流から逸れてしまった世界は存在を許されない。

故に世界が崩壊してしまうんだ。」
　幸太郎が続けて言った。
「海東さんが言っていた世界の崩壊ってそういうことなの…。」
　美空の声は震えていた。
「だが、それと俺の行動と何が関係あるんだ。」
　士がオーナーに尋ねた。
「あなたが”本来のビルドの世界”を崩壊から防ごうとする。そうすると、本来はあり得ないひとつのライダー世界が複数同時に存在してしまうことになる。」
「そうなると、時間のレールがどちらが正しい時間なのか判断できず、どちらの世界線にも繋がらなくなってしまうのです。」
「結果どうなるかと申しますと…。」
「仮面ライダービルドそのものの存在が消える。Ａ世界もＣ世界も共にな。」
　侑斗が続けて言った。
「そんな!?」
　美空は愕然とした。
「そうなると、ビルド以降存在するはずだったライダー達も存在しなくなってしまうというわけです。」
　オーナーは言った。
「だから俺たちは現状繋がろうとしているＣ世界を守るためにもお前達を止めに来たんだ。」
　侑斗が続いた。
「…。」
　士は黙ったままだった。
「士さん。お気持ちは察します。あなたも戦いの中で一度世界の消滅を目の当たりにした。かけがえのない仲間の消滅。さぞお辛かったでしょう。」
「しかし、今回はＡ世界を切り捨てるだけでビルドの存在は守られる。至ってシンプルな話ではあるのです。」
「簡単に言うな…。」

士は酷く低いトーンで言った。
少しの間沈黙が続いた。
「オーナー、やっぱり他に手はないんでしょうか。」
幸太郎が口を開いた。
「オーナーの話は理解できます。でも、やっぱりこうして本来の時間に存在する彼女を見てしまうと…。」
幸太郎は美空を見て言った。
「俺は。」
士も口を開いた。
「俺は、ビルドがC世界へ飛んだあとにこのA世界へ現れた。それは俺の役割は世界の消滅を防ぐためじゃないかと考えている。」
「士さん…。」
「まさか、君の口からそんな言葉が出るとはねぇ。士。」
海東は鼻で笑いながら言った。
「海東…。」
士は海東を睨み付けた。
「いや、士がどこまでやれるのか見届けたくてね。」
「オーナー、私からもお願いします。私達の世界を守って下さい。」
美空はオーナーに向かって頭を下げた。
「ふーむ…。」
オーナーは言葉詰まらせたがようやく口を開いた。
「どちらの世界も救う方法、無いこともありませんよ。」
「本当か!!」
士はその場で立ち上がった。
「しかし、私は正直オススメしません。というより理論上できるけど実行できるかわからない。とでも言っておきましょうか。」
「それはどんな方法なんですか?」
幸太郎も身を乗り出して聞いた。
「仮面ライダービルド。桐生戦兎を特異点とし、A世界とC世界、両方の世界に存在させる。ということです。」
美空にはよく分からなかったが、回りの空気から察してやはり不可

能だということだけはわかった。
「まぁ…。一応、説明致しましょう。」
　オーナーは続けた。
「つまりA世界のビルドとC世界のビルドがお互いの世界の記憶を共有し、なおかつ時間の流れの影響を受けない特異点となれば、仮に時間のレールがC世界に繋がっても双方の世界にいるビルドが懸け橋となることでA世界も存在することが可能となります。」
「特異点の件は正直何とかなります。主人公補正で。」
「おい、さすがにそれは許しちゃダメだろ。」
　土は言ったが、オーナーは無視した。
「ですが、A世界、C世界ともに同一人物かつ双方の記憶を共有する。これば かりは不可能でしょう。」
　化け物同士でじゃれあっていた、赤い化け物・モモタロスが閃いたように話に参加してきた。
「じゃあよ。C世界の未来のビルドをA世界に連れていきゃいいんじゃねぇか。」
「それは一時的には繋ぎ止められますが、連れ去った時間にC世界がたどり着いてしまったら、それ以降の時間にビルドがいないことになってしまうわけですから、今度はいずれC世界が消滅します。」
　オーナーはバッサリと言った。
「ダメじゃねぇか…。」
「つまり双方とも同じ時間軸でビルドが存在しないといけない訳です。」
　土は一瞬考え、あることに思い付いた。
「いや、待てよ。」
　土が呟いた。
「美空、もう一度桐生戦兎について教えてくれ。」
「え、何で？」
「いいから！」
「え、うん。ええっと、桐生戦兎はほんとは桐生戦兎じゃなくて葛城巧で、二人は二重人格みたいな形でいました。それで葛城巧はあること

から顔をツナ義ーズ佐藤太郎に変えられてしまったんです。」
「あ?・何だその複雑なキャラ設定は。」
モモタロスは呆れて言った。
「あ、なるほど。」
オーナーが閃いたように呟いた。
「もしかして、桐生戦兎君は桐生戦兎の人格とは別に葛城巧の人格もある。そういうことでいいんですね?・」
「は、はい。」
美空は答えた。
「それで肉体は本来は葛城巧のものだが、佐藤太郎という人物に書き換えられた。そういうことですね?・」
「は、はい…。」
「何か思い付いたんですか、オーナー。」
幸太郎が尋ねた。
「うーん。道徳観や倫理観に大きく反しますが、できないことはありませんね。」
「それは?・」
士が聞いた。
「それは…。」
オーナーの閃きを聞いた一同は、唖然とした。
しかし、それしかないと踏み、時の列車・デンライナーをある時間へと向かわせるのだった。

第５話

デンライナーはＡ世界に戻り、士達を降ろしたあと、時空の彼方へ去っていった。
「ねぇ…本当に上手くいくの？」
美空は不安そうに士に聞いた。
「どうだかな…。オーナーの理論なら、やれることもないが。」
士も自信があるわけでは無さそうだ。
「でも、美空ちゃんの世界を守るためにもやってみるしかないね。」
「可能性が０でないならば、やってみる価値はあるだろう。」
幸太郎も群青色のイマジン・テディとともに士達に同行してきた。
「…で。」
一同は一人の人物に目を向けた。
「あ？何じろじろ見てんだ。恥ずかしいじゃねえか。」
そこにいたのはモモタロス、ではなかった。
オールバックにした髪の毛に赤いメッシュが入っていて瞳が赤くなっているが、美空には見覚えのある男性がそこにいた。
「そいつに憑依する必要、あったか？」
士は面倒臭そうに言った。
「しょうがないよ。あの様子じゃ、事情を話した所で通じなさそうだったし。」
幸太郎もやれやれといった感じだった。
「でも、今の僕達にとって”彼”はキーマンだ。何かあった時にはモモタロスが守ってくれる。」
「ケガしねぇ保証はねぇけどな。」
男に憑依したモモタロスが言った。
「改めて、作戦を確認しよう。」
テディが確認し始めた。
デンライナーのメンバーと士達が考えた作戦。
それは、Ｃ世界に存在するツナ義ーズ佐藤太郎をＡ世界へ連れ出し、そこで葛城巧の人格を佐藤太郎に植え付け、擬似的に桐生戦兎を

生み出す。ということだった。
　また、御堂がスマッシュを操るデータの存在を仄めかしたことから、葛城巧に関するものはネオファウストが持っていると踏んだ彼らは、侑斗と海東をそこへ潜入させ調査を始める手筈になっている。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「…だが、土台無理な話だ。そもそも、C世界のビルドと記憶を共有させるなんて、馬鹿げてる。」
　侑斗が言ったが、美空はあることを思い出した。
「待って、思い出した。」
「何をだ。」
　士が尋ねた。
「戦兎は、一度葛城巧の人格が甦った事があったの。その時に、万が一に備えてあるものを隠したっていってたわ。」
「あるもの?」
　幸太郎が聞き返した。
「うん。ただそれが何かも、どこに隠したのかもわからないの…。」
　美空は肩を落とした。
「可能性があるなら、パンドラ・タワーだろうね。」
　しばらく黙っていた海東が口を開いた。
「どうして?」
「御堂が言っていた、データとやら。恐らく葛城巧の研究データか何かだろう。そこに葛城巧が何かを隠していても不思議じゃないさ。」
　当然のように海東は答えた。
「葛城巧が隠したあるもの。それに賭けるしかないか。」
　士が言った。
「どうやら…。結論が出たようですねぇ。」
　オーナーが言った。
「では…。目的地は?」

―――――――――――――――――――――――――――

「考えてもしょうがない。行くぞ。」
「私も連れていって。」
　美空は士達にお願いした。
「…乗れ。」
　士は止めることもせず、美空をバイクに乗せ、一同は再びパンドラ・タワーへ向かった。
　タワーへ着くと目の前には無数のガーディアンが待ち受けていた。
「あれは、政府のガーディアンじゃないのか。」
　佐藤太郎に憑依したモモタロス（M太郎）が言うと、
「きっと元からネオファウストとしての機能を持っていたのよ。似たようなこと、前にもあったし。」
　美空が答えた。
　すると、何もない空中に突然映像が浮かび上がり、御堂光明の姿が写し出されていた。
「異世界ライダーの諸君。君たちの目的は分かっている。まさか、平行世界から佐藤太郎を呼び寄せるとは。」
「しかし、残念だがここで潰させてもらう。命が惜しければ引き返すことをお勧めする。」
　御堂は不敵の笑みを浮かべた。
「悪いけど、あんたの思い通りにはさせないよ。僕たち仮面ライダーがいる限り！」
　幸太郎が答えた。隣で士も頷いた。
「非常に残念だ。せめて武運を祈ろう。さらばだ、ライダー諸君。」
　そう言うとモニターは消滅した。
「面倒だが、一気に片付けるぞ。」
　士、幸太郎、M太郎が変身しようとしたとき、汽笛と共に空からデンライナーが姿を表した。
「センパーイ、無茶させちゃダメだって！」
「大事な身体なんや、大切にしとき！」

「わーい、ひっさびさに楽しむぞー！」
「あまりこの様な場は私に似つかわしくないのだが、やむを得ん。」
「カメ公！クマ公！ハナタレ小僧！手羽！」
デンライナーから、４体のイマジン達が降りてきた。
「じゃあセンパイ。ここは僕たちに任せて先に行って！」
「…。行くぞ。」
士達はイマジン達にこの場を託し、先に向かった。
「では行くぞ、家来達よ。」
白いイマジン・ジークが言った。
「せやから、いつからお前の家来なったんや！」
黄色いイマジン・キンタロスが反論した。
「まぁまぁ、キンちゃん。さっさと片付けよう。」
青いイマジン・ウラタロスがなだめた。
「へっへーん♪」
紫のイマジン・リュウタロスはやる気満々だった。
彼らの腰にはベルトが巻かれていた。
「「「変身!!!」」」

「スマッシュを生み出すということは、きっと葛城巧のデータか研究資料を使っているはずよ。」
「ということは、スマッシュを研究している研究室があるはずってことだね。」
「うん。」
「その研究室を探しに海東と桜井侑斗は潜入しているはずだが、どこにあるんだ。」
迫りくるスマッシュを蹴散らしながら、士達一行はタワーの中にあるはずの研究室を探す。
「門矢、こっちだ！」
どこからか侑斗が現れた。
侑斗の後に続くと、そこには美空にとって見覚えのある空間に出た。

「ここって…。」
「間違いないか。」
　士が美空に尋ねた。
「うん。でも本当は西都にあった研究室よ。こんな所にあるなんて。」
「恐らく似せて創られたものだろう。残念ながらそれらしいお宝は見当たらなかったけどね。」
　物陰から海東も現れた。
「お宝お宝って、ちっとも目的をこなしちゃいない。」
　侑斗は呆れていた。
「僕のお陰でこの部屋を見つけたんだ、感謝したまえ。」
「さすがはコソ泥といったところか。」
　士は皮肉を込めて言った。
「とにかく葛城巧に関するデータや資料を探そう。」
　テディはそう言うと手当たり次第コンピューターに手をつけた。
「面倒臭せぇな。その辺探せば見つかるだろ。」
　M太郎も適当にコンピューターを触り始めた。
「モモタロス、あんまり触らない方が…。」
　幸太郎が止めようとするが、M太郎は聞く耳を持たなかった。
「貴様らあああ!!」
　御堂の怒声と共にラビットスマッシュ、タンクスマッシュが士達を襲った。
「ちっ。もう気づかれたか!」
「神聖なる部屋に土足で入る所か勝手に触るなど、万死に値する!!」
　御堂は怒り狂っていた。
「その慌てよう、やっぱりここに葛城巧に関する何かがあるんだね。」
　幸太郎が問い詰める。
「あぁそうだ!そこにはかつて葛城巧が研究してきたデータもある!おまけにこうなることを見越してか、自信の精神データもバックアップしてあるのだ!」
「えらくあっさりと答えたな。」
　士は少し気が抜けた。

「故に、故にだ！貴様らのような汚れた者どもが触っていいものでは…。」
ドカアアアアン!!!
大きな爆発音と共にM太郎が吹き飛んでいった。
「痛てててて…、しまった!!」
憑依が取れたモモタロスと横たわる佐藤太郎の姿があった。
「ぬわあああああああああ!!!!!」
御堂は絶叫していた。
「許さん、ゆるさんぞ俗物どもがぁ！」
そう言うと御堂はアシッド・ハンターへと変わり二体のスマッシュとともに士達へ襲いかかる。
「あった、あったぞ！」
同時にテディも叫んだ。
「もう少しだ、奴らを足止めしてくれ！」
「やるしかないか。」
「モモタロス、力を貸して！」
士、海東、M幸太郎、侑斗は並び、それぞれ変身アイテムを携えた。
「行くぞ！」
「「「変身!!!!!!!!」」」
カメンライド・ディケイド！
カメンライド・ディエンド！
ストライク・フォーム！
アルタイル・フォーム！
４人のかけ声が部屋に木霊すると、それぞれ仮面ライダーの姿に変わった。また、モモタロスは剣の姿へ変わりＮＥＷ電王の手に収まった。
「俺たち／僕たち、参上!!」
「最初に言っておく、俺はかーなーり、強い！」
４人のライダーはそれぞれ迎え打つ。
気がつけば、ディケイド、ＮＥＷ電王がアシッド・ハンターと。ディエンドとゼロノスが二体のスマッシュと戦っていた。

「美空君、そこのカプセルの中に太郎君を！」
テディがネビュラガス注入カプセルを指して言った。
「え!?」
「ネビュラガスとそのカプセルを媒介にして、太郎君に葛城巧の人格データを植え付ける。時間がない、急いで！」
「わ、わかった」
美空は、側にいる佐藤太郎の方へ向いた。
しかし、そこに佐藤太郎の姿がなかった。
「うわあああああああああ!!」
離れた所で情けない叫び声が聞こえた。
物陰に佐藤太郎は隠れていたのだ。
「ちょ、太郎。何してんの早く来て!!」
美空は佐藤太郎を引っ張るが、
「嫌だ嫌だ！何でこんな目に遭うんだ!?」
佐藤太郎は涙目になりながらその場から動こうとしない。
「早くしないと、世界が消えちゃうのよ！」
「んなことないっしょ！何世界が消えるって？俺…、俺ツナ義ーズの佐藤太郎だよ？こんなとこにいちゃいけない人間だよ!!」
美空から離れようと必死になっている。
「いい加減にしなさい！」
パァン！
美空の平手が佐藤太郎の頬を赤く染めた。
「ふひっ？」
「確かに、貴方はツナ義ーズの佐藤太郎よ！でも、桐生戦兎でもあり、仮面ライダービルドなの！」
「いや、ただのバンドマンなんだけど。」
「貴方がビルドになって世界の平和を守るの！貴方が必要なの!!」
美空の涙ながらの訴えに、佐藤太郎も他人事ではないと感じ始めた。
「お、俺に世界の平和を守れって？無理っしょ！いや、無理だから！」
「無理じゃない!!貴方にはそれができるの!!」

「俺が、世界を、守る?」
佐藤太郎は段々と妙な自信がついてきた。何より目の前に可愛い女の子が涙ながらに訴えている。今までの人生の中で経験したことがなかった。
「ほ、本当に俺に世界を守る力があるのか。」
「そう!」
すると、佐藤太郎は立ち上がった。
「お、俺は!ツナ義ーズの!佐藤!太郎だあああああああ!俺に不可能はねえええええ!!」
そう叫ぶとカプセルの中に身体を入れた。
「よし、すぐに始めるぞ!」
テディが装置のスイッチを入れる
「誰だか知らないけど、このあとちゃんと焼き肉おごれよ!」
「わかったから!」
「始動!」
装置の中にネビュラガスが充満していく。
「う、うわあああああああああ!」
「ママああ、ママあああああ!!」
佐藤太郎の叫び声が上がる。
「しばらくの辛抱だ、がんばれ!」
すると、美空があることに気づいた。
「わたし、行かないと!!」
そう言うと近くにあった空のフルボトルを手にし、ディエンド、ゼロノスの後を追った。
「ぐっ」
「うわっ」
ラビットスマッシュとタンクスマッシュの猛攻に二人のライダーは防戦一方となる。
「いたっ!」
美空の声がした。
「バカっ何で来た!!」

ゼロノスは叫ぶが、それと同時にラビットスマッシュは瞬時に美空へ距離を詰めた。
ディエンドは銃を向けるが、
「間に合わない！」
「させるかぁ！」
美空とラビットスマッシュの間に何者かが立ち塞がった！
「デネブ!!」
緑のイマジン・デネブのお陰で美空は無事だった。
「遅いんだよ、デネブ！」
「ごめん侑斗、道に迷った！」
気の抜けるような言い訳だった。
「でもここに美空が来たのはいいタイミングだった。」
「ここからは本気で行くぞ、ゼロノス。」
そう言うとディエンドの手元には新たなデバイスが握られていた。
「当たり前だ。来いデネブ！」
Ｇ４・リュウガ・オーガ・グレイブ・歌舞鬼・コーカサス・アーク・スカル
ファイナルカメンライド・ディエンド！
チャージ＆アップ！
デネビック・バスター！
ディエンドは身体と頭頂部に９枚のカードが浮かび、ゼロノスは緑から錆びた赤色へ姿が変わった。
それからデネブは銃へ姿を変えゼロノスの手元に収まった。
構わずスマッシュはライダーに攻撃を仕掛けるもそれぞれかわされ、ライダー達も確実に一撃を与えていく。
「これで終わりだ。」
ディエンドは新たにカードを装填した。
アタックライド・劇場版！
ディエンドの回りに八体の仮面ライダーが現れた。
ファイナルアタックライド
ＤＤＤディエンド！

フルチャージ！
ディエンド・ゼロノスの射撃と共に、八体のライダー達も各々の必殺技をスマッシュへぶつける。
スマッシュ達は為すすべもなく、ライダーの攻撃を受け爆散した。
「今だ！」
ディエンドのかけ声と同時に、美空は手にした空のフルボトルを差し出す。
すると、爆散したスマッシュ達から光の粒子が浮かび、フルボトルへ吸収された。
「お願い、ベルナージュ！」
美空は祈るようにフルボトルを握った。

第６話

ディケイドとＮＥＷ電王は連携して攻撃するが、アシッド・ハンターは容易くかわし、一方的に攻撃をする。
「蜘蛛の怪人なら、こいつでどうだ！」
ビルドはライダーカードをベルトに装填した。
カメンライド・響鬼！
ディケイドの身体を炎が包み込み、消えると共に紫の鬼のライダーが姿を現した。
アタックライド・音撃棒・烈火
続けてカードを装填すると、Ｄ響鬼は両手に太鼓のバチのような武器を手にした。
「姿を変えたところで、同じことを！」
ハンターの背中の触手から強力な酸を飛ばす。Ｄ響鬼は炎を纏わせた音撃棒で飛んでくる酸を弾き落とす。
ハンターは攻撃の手を変え、触手を伸ばして攻撃を始めた。
ＮＥＷ電王もモモタロスが変身した剣・モモタケンを振り、応戦する。
「今だ、ディケイド！」
一瞬の隙をとり、Ｄ響鬼はハンターの懐に飛び込んだ。
ファイナルアタックライド
ＨＨＨ響鬼！
ハンターの腹に太鼓のようなものが浮かび上がり、Ｄ響鬼は手にした音撃棒を叩きつけようとした。
「小癪な真似を！」
ハンターは手に持つスチームブレードで迫り来るＤ響鬼を切り付け、弾き返した。同時にＤ響鬼から士の姿へ戻ってしまった。
「うわ！」
「士さん！」
「幸太郎！よそ見すんな！」
モモタケンが叫ぶが一瞬の隙を見せたＮＥＷ電王にハンターの容

赦ない攻撃が降り注ぐ。
「うわあ！」
ＮＥＷ電王も変身が解かれ、モモタロスも元の姿に戻ってしまった。
「二人がかりでもダメなのか。」
「モモタロスが悪い訳じゃないけど、テディがいれば。」
「くそぅ。」
三人は膝をついてしまう。
「貴様らに私は倒せんよ。」
ハンターは少しずつ冷静さを取り戻していた。
「私が引き継いだトランスチームシステムとカイザーシステム、そして葛城が残した研究データ。これさえあれば、私は世界の神になる。」
「貴様…世界を手にしてどうするつもりだ?!」
士はハンターに聞いた。
「新世界の創造だよ。荒廃したこの世界はエボルトによるものだが、それが無くても人はいずれ滅びの道を進む。何故かわかるか。」
ハンターは続けた。
「間違った科学のせいだ。この世界で一番知恵のある生命体。それが人間だ。しかしその知恵を正しく使わず、間違った使い方をした結果、間違った科学が生まれ世界を傷つけてしまった。」
「何を…。」
幸太郎が言った。
「考えてもみたまえ。今もなお、世界各地で行われている戦争や紛争はそれを可能とする軍事兵器、即ち人類の間違った科学技術によって引き起こされたもの。また、当たり前のように言われているが、自然破壊でさえ同じことではないか！」
「私は孤高の天才だ。正しい知恵と正しい科学力を持っている。この力で人類を救うのだ。」
ハンターは高らかに笑った。
「その結果が、今も人々が苦しんでいるじゃないか！それにスマッシュなんて怪物で統治しようなんて！」

幸太郎が反論する。
「新世界の創造には、間違った知恵を持った人間など邪魔なだけ。せめて私の管理下にいることが唯一の救いになるだろう。邪魔をするものは神の裁きを受けるのだ。」
「ふざけるな！」
士は言った。
「世界を創るのは一人でするものじゃない。そこに住む民があって初めて世界は成立するんだ。それを否定して独り善がりの考えで世界を創るなど間違っている！」
「何を馬鹿なことを…。」
「お前が民を否定するというのなら、俺達はその民のために戦う！」
「お前は、一体何者だ！」
ハンターは士へ問う。
「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」
「ふん！口だけは立派なようだが、お前達だけで何ができる。」
「我が科学力の前にひれ伏すがいい！」
ハンターは最後の攻撃のために構える。
「お前の科学は間違っている！」
どこからか声聞こえてきた。
「何!?誰だ！」
「っ！あれは！」
彼らの前に一人の男が立っていた。
「佐藤太郎か。」
士は男に尋ねた。
「違う。」
しかし、そこにいるのは紛れもなく佐藤太郎だった。
「僕は、葛城。葛城巧だ。」
葛城巧と名乗る佐藤太郎の腰にはベルトがまかれていた。
「そんな馬鹿な!?」
ハンターは狼狽えた。
太郎は笑みを浮かべると両手に赤と青のフルボトルを持ち数回振

り上げる。
「さぁ、実験を始めようか。」
ラビット！タンク！ベストマッチ!!
ベルトにボトルを二本装填するとレバーを回し始めた。すると、ベルトから太郎の前後にアーマーが生み出されていった。
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？
「変身！」
鋼のムーンサルト！
ラビットタンク!!イエーイ!!!
「仮面ライダービルド。創る、形成するという意味のビルドだ。以後、お見知り置きを。」
太郎の身体を挟み込むように赤と青のアーマーに包まれ、仮面ライダービルドに変身した。その身体は両手両足共、左右で赤と青のアーマーを纏い、マスクには右目に青い戦車の意匠を、左目に赤い兎の意匠を表していた。
「あれが、仮面ライダービルド。」
「幸太郎！」
後からテディと美空が駆けつけた。
「待たせたな、幸太郎。」
「テディ！」
「幸太郎、まだやれるな！」
土が幸太郎に尋ねた。
「あぁ、まだクライマックスじゃないからね！」
「あ！幸太郎、それ俺の台詞!!」
幸太郎も笑みを浮かべながら答えた。
「「変身!!」」
土と幸太郎は、再び仮面ライダーの姿に変わった。
「テディ！」
「うん！」
ＮＥＷ電王が指を鳴らすと、それに答えるかのようにテディは剣へと姿を変えＮＥＷ電王の手元に収まった。

「ようやく俺の出番が来たぜ！」
モモタロスも自分の腰にベルトを巻いた。
「変身！」
ソード・フォーム！
「俺！ようやく参上!!!!」
モモタロスは赤い装甲を身につけ、頭頂部から正面にかけて桃が現れると、二つに別れて複眼になり、仮面ライダー電王に変身した。
「君が仮面ライダーディケイドか。」
ビルドが言った。
「共に戦おう、ディケイド！」
「あぁ、ビルド！」
ハンターの前に４人のライダーが立ち上がった。
「ええい、何人揃おうが結果に変わりはない！」
４人のライダー達は次々とハンターへ攻撃する。それに対応していくハンターだったが、徐々に追い詰められていく。
「こんなことがあり得てはいかんのだ！」
ハンターは背中の触手から蜘蛛の糸を吐き出し、ビルド以外のライダーの動きを止めた。
「くっ」
「ビルドといえど、一体一ならば。」
「巧！」
美空はビルドへ向けて何かを投げた。
「これは、いいものを持ってきたな！」
ビルドは受け取ったものを迷わずベルトに装填する。
ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ!!
「ビルドアップ!!」
輝きのデストロイヤー！
ゴリラモンド!!イエーイ!!!!
姿を変えたビルドは肥大化した右手で強烈な一撃をハンターに叩き込む。
立ち上がったハンターは、触手から酸を飛ばし手に持ったネビュラ

スチームガンを撃つ。しかし、ビルドは左手から巨大なダイヤモンドを生み出し、それを盾にしてハンターの攻撃に耐えた。また、それを右拳で砕き、飛び散ったダイヤの破片をハンターにぶつける。
「ぬわあ!」
ハンターは次々に飛んでくるダイヤの破片をかわしきれず、ついに膝をついた。
ビルドはネットに捕まったライダー達を助けた。
「これで終わりだ、御堂光明!」
ディケイドはデバイスを取り出した。
クウガ・アギト・龍騎・555・剣・響鬼・カブト・電王・キバ
ファイナルカメンライド・ディケイド!
肩から胸元へかけてカードが並び、頭頂部にもカードが現れ姿を変えた。
「俺達も行くぞ!」
スーパークライマックスフォーム
電王を中心に地上で戦っていたイマジン達が融合していき、新たな姿になった。
「いいか、御堂光明。お前の科学が間違っていること。それは人の為にならない科学だからだ!」
ビルドはハンターに告げた。
「何だと!?」
「人の為にならない科学は、脅威となって人を滅ぼす。それはあってはならない事なんだ。」
「だから、僕達はお前を倒す!」
ラビットタンクの姿に戻ったビルドはベルトのレバーを回し始めた。
「黙れぇ!」
ハンターは背中の触手をビルドに向けて伸ばす。
「させるか!」
カメンライド
響鬼!装甲!

ファイナルアタックライド
ＨＨＨ響鬼！
ディケイドはすかさずに装甲響鬼を召喚すると、ハンターの触手めがけ斬撃を飛ばし、全ての触手を切り落とした。
ライダー達は最後の攻撃に備える。
ファイナルアタックライド！
ＤＤＤディケイド！
ボルテック・フィニッシュ！
フルチャージ！
フルチャージ！
４人のライダーは飛び上がり、ハンター目掛けてキックを放つ。
為すすべもなく、ハンターはそれぞれの攻撃に身をさらし、ついには爆発した。
「うわあああああああ!!」
「巧！」
美空はビルドの元へ駆け寄った。
「石動美空。」
ビルドは言った。
「僕は、本当なら新世界の中で消えるはずだった。」
「でも、ネビュラガスのせいなのか。それとも科学だけでは証明できないことが起きたのか。こうして僕は佐藤太郎の身体を借りてビルドになった。」
「うん…。」
美空は自然と涙が流れた。
目の前にいるビルドは桐生戦兎じゃない。
わかってはいるが、かつての仲間が帰ってきた嬉しさが大きく、気持ちが昂っていた。
「士。」
ディエンドとゼロノスも追い付いてきた。
「本当に成し遂げてしまうとは。」
「予想外だったか？」

「どうだろうね。」
「本当に良かった。これで美空ちゃんの世界は消滅から免れた。」
ＮＥＷ電王も胸を撫で下ろした。
「まさか、人格データだけでなく消えたはずの巧自身が宿るとは。」
テディも驚きを隠せなかった。
「彼は、桐生戦兎は向こうの世界で元気にしている。それを君に伝えることが出来てよかった。」
ビルドは美空に告げた。
「よかった…。」
「まだだぁ…。」
後ろの方から御堂の声が聞こえた。
振り向くとアシッド・ハンターから元の姿に戻った御堂の手元にフルボトル数本と、赤いデバイスが握られていた。
「私が…、私が新世界の神となる…。」
「お前、まだそんなことを！」
「待て士、やつは気力で立ち上がっている、自我はない。」
「私が…、神になれぬなら…、こんな世界など、滅んでしまえええ!!」
そう叫ぶと御堂は自身の体にフルボトル数本を突き刺した。
その後、赤いデバイスのスイッチを入れた。
マックス・ハザード・オン！
ビルドはそれが何かようやく気づいた。
「御堂、よせ!!」
しかし、御堂は赤いデバイスも体に突き刺した。
「ヴ、ヴヴ、ぐあああああああ!!」
御堂の身体を黒い煙が包み込んだ。しかし、黒煙はどんどん大きくなっていき、中から黒い巨体の化け物が現れた。その姿はコブラのようにしっぽまで長い胴をしていて、その背中にはコウモリのような巨大な羽を、胴体には蜘蛛のような八本の脚を生やしていた。そしてアシッド・ハンターのマスクをさらに歪めたような顔をしていた。
「ぐあああああああああ!!」
化け物の雄叫びに反応するかのようにライダー達の回りをスマッ

シュが囲うように現れた。
「くそっまだこんな力を！」
ゼロノスが言った。
「いやこれはネビュラガスの暴走だ。ああなってしまったら御堂はもう助からない。」
ビルドが答えた。
化け物となった御堂は、パンドラ・タワーの内壁を突き破り、頂上を目指した。
「何をする気だ。」
「っ！まさか、パンドラボックスか!!」
ビルドは言った。
「あのまま、やつ自身を人柱にしてパンドラボックスを再起動しようとしているんだ!!」
「そうなると、どうなるんだ!!」
ディケイドが尋ねた。
「世界は、消滅する。」
「マジかよ！」
電王は思わず声が出てしまった。
「早く追いかけないと！」
しかし、回りのスマッシュがまた詰め寄る。
「…士さん、貴方は巧さんとやつを追ってください。」
「野上幸太郎？」
「ここは俺達が引き受ける。」
「モモタロスまで。」
「行け、門矢!!」
「桜井侑斗…。」
電王、ＮＥＷ電王、ゼロノスはそれぞれ構えた。
「士、これで行こう。」
そう言うとディエンドは龍騎を召喚すると同時にその姿を龍に変えた。
「任せたぞ。」

「それはこっちのセリフだ。さっさと行きやがれ！」
電王が答えた。
「石動美空、必ず戻る！」
ビルドが叫んだ。
「うん！」
ビルド、ディケイド、ディエンドを背に乗せ、赤い龍はタワー頂上を目指した。

最終話

頂上につくと、今にも化け物はパンドラボックスに接触しようとしていた。
「士、これを使いたまえ。」
ディエンドはディケイドにあるカードを渡した。
ビルドの絵柄のカードとファイナルアタックライドのカードだった。
「ビルド、ちょっとくすぐったいぞ。」
「え？」
ファイナルフォームライド・ビルド！
ビルドはその姿を変え真っ赤なウサギに変化した。青い大砲を背負い、手足にはキャタピラがついていた。その姿はまさしくラビットタンクだった。
「Ｏｈ，ｎｏ！何だこれ!?どういう物理法則でこんなことになるんだ!?」
ビルド・ラビットタンクは困惑していた。
「いいから、やつを止めるぞ！」
ビルド・ラビットタンクは素早く跳躍し、その巨体で化け物に体当たりした。
化け物も口やしっぽからエネルギー弾を放ち反撃するも、脚力を生かした跳躍でかわしたり、足のキャタピラでかわしたりし、背中の大砲を撃ち込む。
ついに化け物はバランスを崩し、地に伏せた。
「今だ！」
ファイナルアタックライド
ＢＢＢビルド！
ビルド・ラビットタンクの大砲から巨大なエネルギー弾が放たれ、化け物に直撃し爆発した。
「やったか。」
元に戻ったビルドが言った。

しかし、爆煙の中から、ボロボロになりながらも化け物はなお立ち上がろうとしていた。
「なんてしぶといやつなんだ。」
「仕方ない、大サービスだ。」
そういうと、ディエンドは四枚のライダーカードを取り出し、装填した。
カメンライド
クローズ！
グリス！
ローグ！
マッドローグ！
いくつものホログラムが重なり合い、４人のライダーが現れた
「今の俺は負ける気がしねぇ！」
「心火を燃やして、ぶっ潰す！」
「大義の為の、犠牲となれ…。」
「難波重工のために。」
「これは…。」
ビルドは驚きを隠せなかった。
「これで決めてこい、ビルド！」
ディケイドは言った。
「…。わかった！」
ボルテック・フィニッシュ！
ドラゴニック・フィニッシュ！
スクラップ・フィニッシュ！
クラックアップ・フィニッシュ！
エボルテック・アタック！
５人のライダーのキックが化け物に直撃する。
ついに化け物は爆散し、その姿は二度と現れることはなかった。
全員地上に戻ってきた。
美空には信じられない光景だった。かつての仲間達が目の前に現れたのだ。

「かず…みん…？」
　美空が尋ねるが、
「かずみん？俺は北都の仮面ライダー、紅カズミだ。」
「え？」
　グリスは確かに〝カズミ〟と答えたが、猿渡一海ではないようだ。
「てか…。」
　グリスは美空のことを見つめた。
「な、何？」
「か、かか…。」
「かわいいいいいいいいいい！」
「ひっ!?」
　突然グリスは雄叫びを上げたかと思うと、頭頂部から蒸気が吹き出した。
　何というか、別人でもかずみんらしかった。
「はっ、北都のライダーって馬鹿みてぇだな！」
　クローズがグリスへ言った。
「あん？何だとゴルァ？」
「やんのか、上等だ！」
　グリスとクローズは互いのマスクをぶつけメンチを切り出した。
「ちょ、やめてよ万丈！」
　美空は思わず止めにかかった。
「万丈？誰だそいつ。俺は長瀬、長瀬リュウガ。東都の仮面ライダーだ。」
　やはり、美空は思わぬ答えに戸惑ってしまう。
「じゃあ、貴方は？」
「西都の仮面ライダー、魅上ゲントクだ。」
「難波重工の用心棒仮面ライダー、鷲尾ナリアキ。」
「すまないね、美空。彼らは君の知る仲間に似ているけど全くの別人だ。」
　ディエンドは答えた。
「…ううん。大丈夫。ありがとう、みんな…。」

美空はみんなにお礼をいった。
空からデンライナーが現れた。
「僕たちはもう行くよ。」
「またどこかで会おうぜ！」
電王達はデンライナーに乗り、時空の彼方へ消えていった。
「葛城巧。」
士は巧を呼んだ。
「これからどうするんだ。」
「ネオファウストやスマッシュはまだ消滅していない。平和を取り戻すには、まだ時間が掛かりそうだ。」
「でも、それぞれの国にライダーが現れた。きっと平和が訪れる日は、そう遠くないはずだ。」
巧は答えた。
「そうか…。」
そう呟いた士の後ろに銀色のオーロラが現れた。
「時間のようだね。また会おう。門矢士君。」
「また近い内に会うかもな。」
「士さん！」
美空が言った。
「本当にありがとう。」
美空の顔は初めて会った時とうって変わってとても輝いていた。
士と海東は笑顔を見せると黙ってオーロラの奥へ消えていった。
「石動美空。」
「…何？」
「僕たちがこうして会うのは、これが最後だ。」
「え、どうして？」
美空は尋ねた。
「僕は仮面ライダービルドだけど、桐生戦兎じゃない。君の求めていたものとは違う答えになったんだ。」
「どんなに頑張っても、僕は桐生戦兎にはなれない。だからこそ、君に失望させたくないんだ。」

「…。」
美空は黙って聞いた。
「だけど、これだけは忘れないで欲しい。君の身に何かあったとき必ず君を守ってみせる。消えるはずだった僕がここにいるということは、きっとそれが僕のやるべきことだと思うから。」
「…そっか。」
「うん。大丈夫。みんながこの世界を守ってくれるって信じてるから。」
美空は何だか清々しい気持ちになった。
「ありがとう。」
巧も思わず微笑んだ。
「それじゃあ、また。シーユー!」
そう言うと、巧はバイクにまたがりどこかへ走り去っていった。
ディエンドに召喚されたライダー達も、それぞれの帰る場所へ戻っていった。

「政府官邸から、パンドラ・タワーならびにスカイウォールの残骸付近でスマッシュの活動が活発化していると発表がありました。ガーディアンを投入しスマッシュの数は、以前より減少傾向にあるとのことでした。市民の安全を保証しているとしており、地域の復興も進んでいるとー」
「嘘ばっかり。」
海辺に佇むカフェ・ｎａｓｃｉｔａ。
報道番組を見ていた美空は呟いた。
決して多くはないが、ここｎａｓｃｉｔａにも客が来るようになった。
政府の発表通り、スマッシュの目撃情報が減ったことで外を出歩きやすくなったからだろう。
でも、それは政府の力だけじゃない。
人知れず、人々の平和のために戦う戦士達がいる。美空はそれを知っていた。

美空は店の外へ出て屋上に上がった。
空を見上げると、雲一つない快晴だ。
こんなに、きれいだったっけ。
美空は不意に涙を流してしまった。
しかし、それは悲しみからではない。
透き通るような美しい空。それはまるで希望に満ち溢れているようだった。美空の涙はそれを表しているようにスーっと流れたものだったのかもしれない。
そして、美空は青空に向かって叫んだ。
「ありがとう、仮面ライダー！」

ｎａｓｃｉｔａより遠く離れた建物の上、仮面ライダービルドの瞳は世界を見渡していた。

―――――――――――――――――――――

「…。という夢を見たんだ。」
万丈龍我は飲んでいたコーヒーを吹いた。
「あ、おい！汚ぇじゃないか！ちゃんと片付けなさいよ！」
桐生戦兎は怒って言った。
「しょうがねぇじゃねぇかよ！何だその夢！」
万丈は噎せながら言った。
「誰だよ、長瀬リュウガって。」
「俺が知る訳ないだろ。」
二人はテーブルを拭いて片付けた。
ここは、カフェ・ｎａｓｃｉｔａ。
石動親子が経営している。今日も客で満席となっていて、桐生戦兎と万丈龍我はフロアの端の方で話をしていた。
「しかしまぁ…。夢の中とはいえ、美空達が元気そうなら良かった

な。」
「つーか、佐藤太郎が仮面ライダー？あいつは死んじまったし、生きてるとしたらこの世界の住人だし、あり得ないって。」
万丈が笑って言った。
「…。本当に夢だったんだろうか。」
戦兎は呟いた。
「あ？」
「夢にしては、その全てが鮮明なんだ。丸で夢の中での出来事を自分が体験していたような…。」
戦兎はこの違和感が何なのか考えていた。
「夢ってそんなもんじゃねぇのか？」
万丈が言うと
「じゃあ、昨日自分が何の夢見てたか覚えてるか？」
戦兎が尋ねてきた。
「そりゃあ…。」
「…。」
「覚えてねぇ。」
万丈は必死になって思いだそうとしていた。
「ほらな。夢ってそんなもんなんだよ。」
戦兎はやれやれといった様子だった。
「けどよ、戦兎。お前自身はここにいたのは間違いないんだぜ。」
万丈は言った。
戦兎と万丈は適当な理由を付けて、ｎａｓｃｉｔａに住み込みのアルバイトとして雇ってもらっている。
同じ部屋で寝泊まりしている二人だからこそ、万丈は戦兎がどこかへ出かけるとこを見たことがなかった。
「まぁな…。戦っているとしたら、身体中めちゃくちゃ痛いし。」
戦兎は軽く肩を回してみるが至って健康であった。
「結局、ただの夢だったんだよ。」
万丈はそういうとコーヒーを口に含んだ。
すると店のカウンターから惣一の話し声が聞こえてきた。

「おいおい大変だぞ、美空！」
「何お父さん。」
　美空は聞き返した。
「ツナ義ーズ、佐藤太郎行方不明により電撃解散だってよ！」
「ええ!?」
　美空はびっくりして声を上げた。
　と同時に万丈はコーヒーを吹き出した。
「だっ、お前、いい加減にしなさいよ！」
「げほっげほっ…。き、聞いたか？ツナ義ーズの佐藤太郎が行方不明って!?」
　噎せながら万丈は言った。
「あぁ。やっぱり夢じゃないのか。」
　その時だった。店の外で爆発音が聞こえた。
　戦兎と万丈は急いで店の外へ出た。
　爆発音の所に着くと、数人のスーツ姿の男達がトラックを襲撃していた。
「何やってんだあいつら。」
「只事じゃなさそうだけど…。」
　しかし、怪物事件ではない。ライダーとなって出る必要がない。
　暫くすると、警察が辺りを囲み始めた。中には武装した警官もいた。
「ただの犯罪なら、警察の仕事か。」
　万丈がそう言った時だった。
　スーツ姿の男達は、おもむろにＵＳＢメモリのようなものを取り出した。
「何だあれ…。」
　マスカレイド！
　スーツ姿の男達はそのメモリを喉元に突き刺した。すると、男達はドクロのようなマスクを身につけ、警官隊を襲い始めた。
　警官隊は為すすべもなく倒されていく。
「何だあいつら！この世界は平和だったんじゃないのか!?」

万丈が言った。
「きっと、融合するためのＢ世界にも何かの驚異があったんだ。」
戦兎が答えた。
「マジかよ。」
「ほら、突っ立ってないで行くぞ！」
二人はスーツ姿の怪人の中へ飛び込んでいった。
「何者だ！」
スーツ姿の怪人の一人が言った。
「俺達は愛と平和のために戦う、正義のヒーローだ！」
戦兎が答えた。
「え、それマジで言うの？そんな大々的に言っちゃうやつなの？」
「え、万丈引くなよ。乗れよ！俺だけ恥ずかしいじゃないか。」
二人のやり取りにスーツ姿の怪人達もどうしたらいいのか分からなくなっていた。
「最悪だ…。出落ち感ハンパねぇ…。」
「いいから行くぞ。」
落ち込む戦兎をよそに、万丈はドラゴン型のデバイスとフルボトルを握っていた。
Ｗａｋｅ　ｕｐ！　Ｃｌｏｓｅ—Ｚ　Ｄｒａｇｏｎ！
万丈はフルボトルをドラゴンに挿入し、ベルトにそのまま装填した。
そして、ベルトのレバーを回すと前後に青いアーマーが現れた。
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？
「変身！」
Ｗａｋｅ　ｕｐ　ｂｕｒｎｉｎｇ！
Ｇｅｔ　Ｃｌｏｓｅ—Ｚ　Ｄｒａｇｏｎ!!
イエーイ!!!
アーマーが万丈を挟み込むと、仮面ライダーの姿になった。
「仮面ライダーだと!?」
スーツ姿の怪人は構えた。
「ん。俺達の事を知ってんのか？まぁいいや。負ける気がしねぇ！」

そういうと、仮面ライダークローズは怪人に立ち向かって言った。
「ちょちょちょ、万丈！勝手にいきやがって。」
しかし、戦兎の両手にもフルボトルが握られていた。
「さぁ、実験を始めようか。」
そして、フルボトルを振ると、ベルトに装填した。
ラビット！タンク！ベストマッチ!!
ベルトのレバーを回すと万丈と同じく赤と青のアーマーが前後に展開された。
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？
「変身！」
鋼のムーンサルト！
ラビットタンク!!
イエーイ!!!
アーマーが戦兎を挟み込み、仮面ライダービルドになった。
「勝利の法則は、決まった！」
世界が変わっても、人々の愛と平和のため、仮面ライダー達は今日も戦う。

完

サイドストーリーズ
惣一の決意（第1話）

目を覚ますと、石動惣一は病院のベッドで横になっていた。
「ぐっ…。」
身体を起こすが、同時に頭痛が走る。
何故こんなところに…。
しかし、徐々にではあるが、惣一は思い出してきた。
火星へ行ったこと。
そこでパンドラボックスを見つけたこと。
そして、地球外生命体・エボルトに身体を乗っ取られたこと。
それから、エボルトによる悪事の数々。
「やめろ…。やめてくれ…。」
突然、かつて感じたことのない罪悪感を覚え、吐き気を催した。
「安心しろ、全ては終わったことだ。」
部屋隅から男の声がした。
「だ…、誰、だ。」
惣一は吐き気を我慢し、声の主に尋ねた。
「ただの旅人だ。」
そういうと陰から男が姿を表した。
カーキのロングコートに日除けの帽子を身に付けた眼鏡を着けた男だ。
「あ…、あんたは…？」
「私の名は鳴滝だ。」
鳴滝と名乗る男が答えた。
「全ては、終わったというのは？」
「その言葉の通りだ。仮面ライダービルド・桐生戦兎によって、エボルトは倒された。」
鳴滝の言葉に自分の耳を疑った。
「それは、本当なのか？」

惣一は鳴滝に聞いた。
「ああ。」
「そうか…。」
「ただし。」
鳴滝は続けた。
「それで世界が平和になった訳じゃない。エボルトを失ったことで、パンドラボックスから際限なくスマッシュが生み出され、町を破壊しはじめている。」
「なんだと!?」
惣一は思わず声を上げた。
「残念ながら、事実だ。」
「しかも、エボルトとの戦いでこの世界の仮面ライダー達は全滅してしまった。最早世界を守る存在はいない。」
鳴滝は坦々と言葉を続けていく。
「何か手はないのか…。」
惣一は呟いた。
「あるとも。」
鳴滝は答えた。
「何…?」
「私はそのために君に会いにきたのだ。」
そう言うと、鳴滝はコートの懐からあるものを惣一に渡した。
「これは…。」
惣一には見覚えのあるもの、トランスチームガンとコブラフルボトルだった。
「ブラッド、スターク。」
惣一は無意識の内に呟いていた。
それは、エボルトがスタークとして暗躍していた時に使っていたものだ。それを思い出すだけでも、酷い嫌悪感を感じていた。
「返す。こんなもの二度と見たくない。」
惣一は、鳴滝に押し返そうとしたが、
「これを使え、石動惣一。」

鳴滝はもう受け付けていなかった。
「これを俺に使わせて、何をさせる気だ！」
惣一は鳴滝を睨みつけた。
「何もさせやしない。好きに使えばいい。」
鳴滝は言った。
「君なら使えるはずだ。それを使えば、ある程度スマッシュと戦える。」
「…何？」
これでスマッシュと戦え。
惣一にはそう聞こえた。
「いずれ、この世界をある人物が訪れる。その時までこれを使って戦うんだ。世界の滅亡を防ぐ為にも。」
鳴滝は言った。
「本当なら、それを使って”ヤツ”と戦って欲しかったが、事が事なのでな。」
「ヤツ？」
惣一は鳴滝に尋ねた。
「いずれ分かる。」
そう言うと鳴滝の後ろに銀色のオーロラが現れた。
「何だ!?」
惣一は驚いた。
「私も旅の途中だ。また会おう。」
鳴滝はオーロラの奥へと消えていった。
「お帰りなさい、お父さん！」
病院から退院して、ｎａｓｃｉｔａに帰ると美空が胸に飛び込んできた。
「おぉ、美空。元気そうで良かったよ。」
惣一は少しホッとした。
「あ、お父さん…。お父さんの淹れたコーヒーが飲みたいな。」
美空は言った。それが何を意味するのか、惣一には分かっていた。
「…。ちょっと待ってろ。」

惣一はコーヒーを淹れ、美空に渡した。
「…ありがと。」
美空は恐る恐るコーヒーを口にした。
すると、突然美空は大粒の涙を流し始めた。
「え、ええ!?もしかして不味かったか!?」
美空が口にしたカップをとり、惣一も味をみる。
しかし、惣一の舌が馬鹿になっていなければ、特段不味いとは思わなかった。
「…。ううん。美味しいよ。美味しいの。だから、嬉しくて…。」
「本当の、本当のお父さんだって…。」
美空は泣きながらそう言った。
「美空…。」
惣一はホッとした。それから美空を抱き締めた。
「悪かったな、美空。長い間、寂しい思いをさせちまって。」
「ううん。」
エボルトとしてではなく、惣一自身として美空を抱き締めることができ、惣一も知らない内に涙を流していた。
それから数日が経ち、ジャーナリストの滝川紗羽の手伝いもあってｎａｓｃｉｔａの営業を再開し始めた。
最初は客脚もちらほらあったが、数日もしない内にぱったりとなくなってしまった。
「全然、客が来ねぇな。石動惣一自慢のコーヒーが飲めるってのに。」
そうは言うものの、惣一自身もその理由は分かっていた。
テレビで連日報道されている、スマッシュの情報。化け物が町をうろついていると知れば、家に籠るのは当然のことだろう。
その時、惣一はあることを思い出した。
ー君なら使えるはずだ。それを使えば、ある程度スマッシュと戦える。
「…美空。ちょっと買い出しに行ってくる。暫く店のこと、頼んだぞ。」
「え?う、うん。」

美空に店を任せ、惣一は店を後にした。
まさかな。
惣一はそう思い、店の買い出しを済ませる。帰り道に差し掛かったとき、スマッシュが現れた。
「グウウウウゥ…。」
「マジかよ。」
惣一は少しずつ下がっていく。それと同じように、スマッシュも惣一に詰め寄る。
ー好きに使え。
その言葉を思い出し、惣一は持ち出していた、トランスチームガンとコブラフルボトルを取り出した。
「やってみるか…!」
フルボトルを振り、トランスチームガンに装填する。
次の言葉を惣一は覚えていた。
「蒸血!」
コブラ…。コ、コブラ…。
ファイア!
トランスチームガンから撃ち出された黒煙が惣一の身体を包み込み、赤いコブラの怪人・ブラッド・スタークへと姿を変えた。
スタークは恐る恐る自分で身体を動かしてみる。しかし、これと言って変わった様子はなく、自身で動かせることを確認した。
「…行くぞ!」
スタークは片手に持った剣を振り、スマッシュへ切りつける。
惣一はエボルトに憑依されていたことで、スタークとしての戦い方を覚えていた。
皮肉なことに、憎悪の対象であるエボルトの力によって戦うことができている。惣一は嫌悪感を感じていたが、それよりも戦う力を得たことに、気持ちが昂っていた。
スタークは一度トランスチームガンからフルボトルを外し、数回振った後に再び装填した。
そして、スチームブレードとトランスチームガンを合体させ、ス

マッシュに向けて一撃を放つ。
それは、スマッシュの身体を突き抜け、スマッシュは爆発した。
元の姿に戻ったあと、惣一は再び握っていたフルボトルを見つめる。
「戦兎…。俺は、分かっていながらエボルトを止めることができなかった。その結果、世界は荒廃し、お前達まで犠牲になっちまった…。すまん。」
「だから、俺が変わりにこの町を、美空を守る。それで俺の罪が許されるのなら、力尽きるまで戦ってやる。それで、いいよな…。戦兎。」
美空や町の住人達。彼らは石動惣一の決意を知らなかった。そして、人知れずたった一人でスマッシュと戦っていたことを。
やがて、客のいないｎａｓｃｉｔａに、一人の男が訪れるのだった。

Lの嫉妬／ツナ義ーズ絶好調（第５話）

今日も絶好調だった。
ライブステージも満席だった上に、女性ファンからの黄色い声援。
そして、ファンと共に叫ぶあの言葉。
「夜はー？」
焼き肉っしょおおおおおおおおお！！！！
佐藤太郎は感無量だった。
相棒の岸田立弥と立ち上げた、パンクバンド・ツナ義ーズ。その名の通り、太郎は赤い繋ぎを、立弥はオレンジの繋ぎを着てライブを続けて早三年。
インディーズとして活動していたが、みるみる内にヒットしていき、今では大型ライブステージを巡るツアーまで行うまでに至った。
「アニキぃ、今日も絶好調でしたね！！」
ワゴン車の中で、立弥は太郎に話しかけた。
「ったりめぇよ！見たか立弥！何人か失神して倒れてたぞ！」
太郎は得意気に言った。
「見たっすよ！俺達の熱い想いが観客に響いたんすね！」
「まさかこんな日がくるとは…。思えば、今まですげぇ苦労してきたなぁ、立弥。」
太郎はしみじみと言った。
「そうっすねぇ。繋ぎの色でどっちも赤いのにしようとして、揉めに揉めましたもんね。」
「そこじゃねぇよ、バカっ」
「しゃっせ。」
「どうすりゃ、俺達の魂の声が届くのか。考え過ぎて、立弥、お前頭爆発しちゃってアフロになっちまったもんな！」
「そこじゃねぇっすよ、バカっ」
「しゃっせ。」
「ガッハハハハハハ！！」
「っしゃあ、マネージャー！次行っちゃってぇ！」

太郎の合図と共にワゴン車は次のライブへ向けて出発した。
そして、それを遠くから見ている人影があった。
「あれが佐藤太郎か。」
門矢士は美空に尋ねた。
「う、うん。」
石動美空は頷いた。
「なんかこう…、思ってたのと違うような何というか…。」
野上幸太郎は何とも言えない気持ちになった。
「顔はいいが、悪魔とも言われた天才科学者があんなヤツに変えられたとなると、不憫に思えるな。」
士は哀れむように言った。
「そうなの…。戦兎として見慣れてるからカッコいいと思っていたけど、リアルの佐藤太郎ってあんな感じだったんだ。」
美空もガッカリしていた。
「ま…。まぁ、彼を見つけることは出来たんだし、早速行動と行きますか。」
イマジンと呼ばれる青いイマジン・ウラタロスが促すように三人に言った。
「というか、何でお前がついてきたんだよ！」
士は帰れと言わんばかりに言った。
「そりゃあ、彼を口説く為に僕は必要不可欠だと思うけどなぁ。」
「まぁ、ウラタロスの交渉力は役に立つと思うし。」
幸太郎がフォローを入れるも、
「女限定じゃなかったか？」
士が間髪いれずに言った。
「もちろんそうだけど、事が事だからワガママ言ってる場合じゃないことくらい、僕だって分かってるさ。」
「し…、信じていいのね？」
美空が確認する。
「もちろん、美空ちゃん。」
疑わしかったが、幸太郎の言葉もあり信じることにした。

「とにかく後を追うぞ。」
士達一行は佐藤太郎の後を追いかけた。
しばらくすると、ツナ義ーズを乗せたワゴン車はライブ会場であろう場所についた。
すでに会場付近にはファンであろう人集りが出来ていた。
「何これ、すっごい数。ツナ義ーズってこんなに人気あるの!?」
美空は驚きを隠せなかった。
すると、ワゴン車は搬入口近くに停まると中からツナ義ーズが降りてきた。
「ツナ義ーズよ!!」
「佐藤太郎様だわあ!!」
「焼き肉食べさせてえ!!」
「きゃーーーーー!!」
「立弥キモイーー!!」
「アーニキィー!!」
ファンの熱烈な歓迎を受けて、太郎は答えた。
「ファンのみんなー!!フッフッフゥウウウウウ!!会場の中で待ってるぜぇ!!合言葉忘れんじゃねぇぞー!!」
「焼き肉ぅー!!」
ファンの一人が叫んだ。
「まだ早ぇよ、バカっ!!」
「しゃっせ。」
「「「ガッハハハハハハ!!!!!!」」」
「じゃあな!!」
そういい、ツナ義ーズは会場へと入っていった。
士達一行は唖然としていた。
「…。どうやって入ろうか。」
やっとのことで幸太郎が口を開いた。
「…そうだな。」
士は我に返り辺りを見渡す。思いの外、外の警備が厳重で、複数人で忍び込むには難題だった。

「早速、僕の出番だね。幸太郎、身体借りるよ！」
そう言うと、ウラタロスは幸太郎に憑依した。幸太郎の瞳は青くなりメガネを掛けていた。髪型も右側を掻き上げるように髪を耳に掛け、青いメッシュが入った。
「ええ!?こ、幸太郎さんのなかにイマジンが入った!?」
美空はさらに驚いていた。
「イマジンの特徴さ。」
幸太郎に憑依したウラタロス（U幸太郎）が答えた。その声は幸太郎のものではなく、ウラタロスの声だった。
「おい、いきなりで大丈夫か？」
士は心配そうで言った。
「大丈夫っ、警備係のおじさんに中に入れて貰えるように話してくるから。」
U幸太郎は裏口の警備係に話しかけに言った。
「ほんとに大丈夫なのかな…。」
「まぁ、アイツに任せるしかないか。」
U幸太郎を待ってる間、美空は辺りを見渡した。
すると、あるものが目に映った。
「ねぇ、士さん。この町ってあんなにおっきい風車があるんだね。」
「え。」
そう言われ、士は美空が指した方向を見た。
それは高層ビルよりもさらに高い建造物だった。美空の言うように風車のようなものがゆっくりと回っている。
「まさか…。」
士はさらに辺りを見渡す。よく見ると町の至る所に風車のモニュメントがあり、掲示板などに風車を象ったマスコットキャラクターのポスターが貼られていた。
「ここは、まさか…。」
「おーい！」
U幸太郎の呼び声が聞こえた。
U幸太郎の計らいにより、士達は無事に会場へ入ることが出来た。

客席はひとつも空席を作っておらず、それがツナ義ーズの人気具合を表していた。
　しばらくして、会場内にブザーが鳴り響いた。
「本日は、ツナ義ーズライブツアー・燃えよ！ツナ義ーズ！にご来場いただき誠にありがとうございます。」
「ツナ義ーズのライブに先立ち、様々なアーティスト達が応援に来て下さいました。まずは、Ｒｙｕ―Ｔａ．ｆｅａｔ．風都ジャーニーズです！」
「え？」
　りゅうた…？
　士達は聞き違いだと思ったが、始まったイントロから確信に変わった。
　いーじゃん、いーじゃん、すげーじゃん！
　いーじゃん、いーじゃん、すげーじゃん！
　ラップが始まると共に若者達が登壇し、ブレイクダンスを披露した。ホール内は三人を除いて拍手が鳴り響く。
「みーんなー！今日は遊びに来てくれて、ありがとー!!」
　一人の青年が叫ぶ。
　その声は、紛れもなくリュウタロスだった。
「あのバカ、何してんだ!!」
　士は思わず叫んだ
「リュウタ…。」
　Ｕ幸太郎は頭を抱えた。
「…どういうこと？」
　美空には意味がわからなかった。
「続きまして、演歌”だぶるあくしょん”です、どうぞ！」
「は？」
　嫌な予感がしたが、その予感は的中してしまった。
　黄色い着物を着た中年男性が演歌を歌った。
　俺の、俺の、俺の強さにお前が泣いたぁ～。
　キンタロスだった。

「何してんだアイツら！」
土は嫌になってきていた。
「あぁ…。」
U幸太郎は両手で自分の顔を覆った。
「…何、何なの？」
美空にはやはり意味がわからなかった。
休憩時間となり、土達は舞台裏へ行った。
「何してんだ、お前ら！」
裏で待機してたリュウタロスとキンタロス（どちらも人間に憑依している）に土が怒声を上げた。
「だってだってぇ。面白そうだったし、亀ちゃんだけ外出てズルいよ～。」
リュウタロスは駄々をこねた。
「それに、僕のお得意洗脳で何とかなってるし！」
「そう言う問題じゃないだろ…。」
土は呆れた。
「それに、亀ちゃんはともかく、モモタロスはこの後活躍するじゃん！」
「そう言うこと言うんじゃない！」
「あれ、モモタロスは来なかったの？」
美空がリュウタロスに聞いた。
「うん、唐辛子入りプリン食べさせてきたから。」
「どういうこと？」
「もういいだろ。」
土が止めた。
「ぐがっ…。」
キンタロスは座りながら寝ていた。
「ハァ…。」
土は深いため息をついた。
「ほ、ほらほら。そろそろ後半始まるよ。リュウタ、キンちゃん連れてデンライナーに帰りな。」

「はーい。」
客席に戻るとまもなくライブが再開した。
「それでは、お待たせしました！ツナ義ーズです、どうぞ!!」
アナウンスの直後、太郎と立弥は上袖下袖から飛び込んできた。
「こんにちわぁ！佐藤太郎でぇす！」
「岸田立弥っす！」
「今日は盛り上がっていきまっしょー、フッフッフゥウウウウウ!!」
ライブが始まった。
上手いのかどうかわからないが、会場の空気感が一気に変わった。
何曲か歌い終わり、佐藤太郎が話し出そうとした時だった。
「こんなの、音楽じゃねぇ!!」
一人の男性客が叫んだ。
「へ？」
突然のことで太郎も声が出なかった。客席にもどよめきが広がった。
「何だ？」
士達はその男性客の方を見た。
男性客はステージに上がるとマイクを手に言った。
「最近の野郎のは音楽なんかじゃねぇ。ただ叫んでるだけでちっとも面白くない！」
警備係がステージに上がろうとしていた。
「それなのに、そんなものが世間に認められて、俺の音楽が認められないなんて許せないんだよ！」
「こんなステージ、めちゃくちゃにしてやる！」
警備係が男性客に飛び付こうとした時だった。
ライアー！
男性客はＵＳＢメモリのようなものを自分の腕に差した。するとその姿は怪人へと変わった。
怪人は飛び付いてきた警備係をなぎ倒し、ツナ義ーズに詰め寄る。
「うわあああああああああああ!!」
情けない声をあげ、太郎と立弥は腰を抜かしてしまった。

客席にいた人達も、我先にと逃げるように会場を出ていこうとしていた。会場内はパニックに陥ってしまった。
「ドーパントか！」
士は怪人の正体を知っているようだった。
「え、どうして怪人が!?」
美空は驚いた。ここ新世界は平和だと思っていたからだ。
「やはり、Ｃ　世界は歴代ライダー達が戦ってきた世界か！」
士とＵ幸太郎は変身しようとした時だった。
「そこまでだ！」
客席から二人の男性が立ち上がっていた。

Ｌの嫉妬／ツナ義ーズ電撃解散（第５話）

士達は声を上げた方を見た。
「お前か！近頃ライブハウスを襲撃しているヤツは！」
シャツにベストを身につけ黒いハットをした男性が言った。
「みんなが楽しんでいる場をこんなにして、不粋だねぇ、君は。」
髪の毛にいくつかヘアピンをつけ、ハットの男とは対象的にカジュアルな格好をした青年が続けて言った。
「お、お前らは何だ！」
怪人・ドーパントが言った。
「俺達は、風都の平和を守る！」
「仮面ライダーだ!!」
二人はそう言うとそれぞれＵＳＢメモリを手に持つ。
二人の腰には赤いベルトが巻かれていた。
「嘘!?」
美空は思わず口にした。
サイクロン！
ジョーカー！
「「変身!!」」
先にカジュアルな格好の青年が自身のベルトに緑色のメモリを装填する。するとそれはもう一人のベルトに現れ、ハットの男性は続けて自身の黒いメモリを装填した。
サイクロン！ジョーカー！
するとハットの男性を木枯らしが覆い、中から仮面ライダーが現れた。
その姿は身体の左半分が黒で右半分が緑色をしていて、首元で銀色のマフラーがなびいていた。
「さぁ、お前の罪を数えろ!!」
「か、仮面ライダーＷか!?」
ドーパントは狼狽えた。
「行くぜぇ…。」

左手をスナップすると、仮面ライダーWはドーパントに攻撃を仕掛ける。
Wはドーパントをホールの外へ連れ出した。
「ほんとに他にも仮面ライダーがいるんだ…。」
突然のことで、美空は驚きを隠せなかった。
「会場はパニックになっちゃったけど、今なら佐藤太郎に接触できそうだね！」
U幸太郎が言った。
「よし、行くぞ。」
士達は佐藤太郎を探しに行った。
美空は近くで先ほどのカジュアルな格好をした青年が気を失っているのを見つけた。
「え!?ちょ、大丈夫ですか!?」
美空が声をかけたとき、女の人が現れた。
「大丈夫大丈夫！あたしが連れてくから、貴女は早く逃げて！」
「は、はい。」
女の人は青年を背負うと、仮面ライダーの後を追うように外へ出ていった。
Wはドーパントの攻撃をかわし、次々と一撃を与えていく。ついにドーパントは膝をついた。
「メモリブレイクだ、翔太郎。」
「オーケーだ、フィリップ。」
それはまるで一人で会話しているようだった。
Wはベルトから黒いメモリを抜き取り、右側のホルダーに装填した。
ジョーカー！
マキシマムドライブ！
するとWを中心に竜巻が起き、その身体は宙に浮いた。
「「ジョーカー・エクストリーム!!」」
風の勢いに乗りWはドーパントへ飛び蹴りを仕掛ける。途中、Wの身体はセンターで別れ、黒い身体と緑の身体でそれぞれ蹴りを入れ

た。
「うわあああ!!!!」
ドーパントは爆発し元の人の姿に戻った。それと同時にメモリが身体から抜け落ち砕けた。
「ったく、せっかくのツナ義ーズのライブだったってのによ。高かったんだぜ、チケット代。」
ハットの男・左翔太郎は愚痴をこぼした。
「翔太郎ー!」
「おぉ、亜樹子。」
青年・フィリップを担いで女性・鳴海亜樹子が追い付いてきた。
「どうなってんの、あたし聞いてない!」
亜樹子は言った。
「それは僕たちも一緒だよ、あきちゃん。」
フィリップは意識が戻り、自分で立ち上がった。
「中々興味深いバンドだったね。今度、全曲検索してみよう。」
「なぁ、フィリップ。今日のライブ代、払い戻しって出来るよな?」
翔太郎はフィリップに尋ねた。
「それは無理だね、翔太郎。」
フィリップは呆気なく答えた。
「だよなぁ〜。」
「なぁ、亜樹子。ドーパントも絡んだことだし、今日のライブ代、経費から落とさねぇか?」
今度は亜樹子に尋ねた。
「そんな訳ないでしょ!ほら、事務所に戻るわよ!」
「俺のポケットマネーがぁ…。」
三人は鳴海探偵事務所に帰っていった。
「な、な、何だったんだ…。」
太郎は必死の思い出楽屋まで逃げることができた。
立弥はまだいなかったが、そのうち来ると思っていた。
「でも、仮面ライダーかぁ…。」
太郎の脳にはWの戦いが鮮明に焼き付いていた。

「カッコよかったなぁ～…。俺も成れたりしねぇかな。ツナ義ーズ佐藤太郎・仮面ライダーとなり世界を救う！ぜってぇ売れる！バカ売れだ！」
ガチャッ
楽屋のドアが開いた。
「遅ぇよ立弥、今すげぇこと思い付いたん、だ？」
そこにいたのは立弥ではなかった。
首にトイカメラを提げた男とメガネをかけた男、それと小柄な若い女がいた。
「だ、誰？」
太郎は尋ねた。
「佐藤太郎、お前を迎えに来た。」
士が言った。
「迎えに、ってマネージャーまだ来てないけど。」
「違う。」
「…あっ、もしかして俺のファン？悪いねぇ、サインならお断りだぜ！」
「それも違う。」
「じゃあ、何なんだよ。」
美空が答えた。
「貴方に世界を救ってほしいの。」
「…はぁ？」
太郎は耳を疑う。
「君に仮面ライダーになってもらいたいって訳。」
U幸太郎が言った。
「仮面ライダー？成れるの？マジ!?」
こいつはバカだ。士は思ってしまった。
「なるなるなる！何すればいいんだ!?」
太郎は言った。
「私達の世界に来て、悪と戦うの。」
美空が言った。

「私達の、世界？」
　太郎は聞き返した。
「私はこの世界の平行世界からやってきたの。私達を救うために、貴方には私達の世界に来てほしいの。」
　美空が言った。
「は？へーこーせかい？そこへ行く？何ワケわかんないこと言ってんの？」
　太郎は言った。
「だいたいそんなとこ行ったら、ツナ義ーズはどうなっちゃうの？やっと軌道に乗ってきたんだぜ!?」
「お前さっきライダーになるって言ってたじゃないか。」
　士が言った。
「成りたいよ！だってツナ義ーズが仮面ライダーってめっちゃかっけぇじゃん！」
　こいつはバカだ。ウラタロスもそう思ってしまった。
「バンドも大事なのはわかるけど、世界を救うことだってものすごい大事なことだよ？君が仮面ライダーとして悪と戦ってくれたら、すごいカッコいいと思うんだけどなぁ～。」
　U幸太郎が説得する。
「待った。さっきから言ってる悪って何？え、さっきの化け物のこと？」
　太郎が尋ねると三人は静かに頷いた。
「バカ言ってんじゃないよ。無理に決まってるっしょ、そんなこと！危ないから！」
「時間がないんだ、頼むから一緒に来てくれ。」
　士が焦るように言った。
「知るか、んなもん。だいたい何なんだあんた達は！へーこーせかいだの悪と戦えだの。け、警察呼ぶぞ。」
　すると、太郎は自分のスマホを取り出し電話を掛けようとした。
「さっきから、ネチネチネチネチ何やってんだ！めんどくせぇ!!行くぜ行くぜぇ!!」

どこからか声がした。
「今度は何!?」
その途端、太郎は意識を失った。
「「あ。」」
三人は声を出してしまった。
気がついたモモタロスが佐藤太郎に憑いてしまったのだ。
「ちょ、ちょっとセンパイ?いくらなんでも強引じゃない?」
U幸太郎はM太郎に言った。
「しゃーねぇだろ。こうするのが手っ取り早くていいだろうが!」
しかし、時間がないのは事実だった。
「ま…。とにかく用は済んだ。さっさと戻るぞ。」
士達はデンライナーへと戻ろうとした。
「あ、待って。」
美空が呼び止めた。
「どうした。」
ここは新世界。つまり、戦兎や万丈がいるはず。
でも…。
「…。ううん。何でもない。」
デンライナーは美空達を乗せ、元のA世界へと走って行った

イマジンの戦い（第６話）

「じゃあセンパイ。ここは僕たちに任せて先に行って！」
青いイマジン・ウラタロスが促した。
「…。行くぞ。」
士達はイマジン達にこの場を託し、先に向かった。
「では行くぞ、家来達よ。」
白いイマジン・ジークが言った。
「せやから、いつからお前の家来なったんや！」
黄色いイマジン・キンタロスが反論した。
「まぁまぁ、キンちゃん。さっさと片付けよう。」
ウラタロスがなだめた。
「へっへーん♪」
紫のイマジン・リュウタロスはやる気満々だった。
彼らの腰にはベルトが巻かれていた。
「「「変身!!!」」」
４体のイマジンの身体をアーマーが包み込み、それぞれ姿の違う仮面ライダー電王になった。
「降臨！満を持して。」
「お前達、僕に釣られてみる？」
「俺の強さにお前らが泣いた！」
「お前達、倒すけどいいよね？答えは聞かないけど！」
「て言うか、ジークの後に続くのって、何だか違和感あるねぇ。」
Ｕ電王は言った。
「お供の分際で何を言うか。行くぞ！」
Ｗ電王が言うが、
「じゃあ、僕から行くよ！」
「よしきた！行くでぇ！」
既に、Ｒ電王とＫ電王は先陣を切っていた。
「キンちゃん、リュウタ…。また…。」
Ｕ電王は頭を抱えた。

「…。私は今初めて君がまともな家来だと確信を得たぞ。」
W電王がU電王に言った。
「それはどうも。」
U電王とW電王も加勢しに行った。
無数のガーディアンを様々な電王達が蹴散らしていく。
暫くすると、スマッシュも数体姿を現した。
「お、中々骨のあるやつが現れたな！」
K電王はデンガッシャー・アックスモードを手に、スマッシュに立ち向かった。
一振り一振り、スマッシュに斬りかかる。確実にダメージを与えているが、スマッシュの強固な身体のため致命傷には至らなかった。
「なんちゅう固さや。だが、これならどうや！」
持っていたアックスをしまうと、K電王は相撲の四股を踏むような構えを取った。
スマッシュは構わずK電王に迫る。
「よしきた！」
スマッシュが間合いを詰めて来た所を張り手で押し返した。
「まだまだ！」
K電王は立て続けに張り手を繰り出していき、効いてきたのか、スマッシュは体勢を崩した。
「これで仕舞や！」
フルチャージ！
K電王は再びアックスを持つ。なおもスマッシュは駆け寄って来るが、K電王は最後の張り手で押し返した。
その後、高く跳び上がり降下の勢いに乗せてアックスを振り下ろした。その斬撃はスマッシュの頭頂から地面まで直線を描き、スマッシュは爆散した。
「ダイナミック・チョップ！」
ガーディアン達がR電王に向けライフルを撃ち込む。しかし、R電王は軽快なステップを踏み、銃弾を避けていく。また、避けながらもデンガッシャー・ガンモードで的確に射撃をしていた。

「そんな攻撃、僕に当たる訳ないじゃん！」
R電王は余裕を見せながらも一体また一体とガーディアンを破壊していった。
すると、スマッシュが現れR電王に氷の矢を飛ばし始めた。
「おっと！」
R電王はかわすも、スマッシュは針を飛ばし続ける。
R電王は手にした銃で氷の矢を撃ち落とす。お互いに弾を撃ち続けながら距離を詰めていく。するとスマッシュは矢を飛ばすのをやめて、腕に氷の針を纏わせ接近戦をしかけてきた。
「近づいて来たって！」
振りかかった腕を銃の尻で払い落とし、脚でスマッシュを蹴り飛ばした。そして、体勢を崩したスマッシュにR電王はさらに銃弾を撃ち込む。
「とどめ！」
フルチャージ！
手にした銃を両手で構えを直すと、両肩のエネルギー増幅装置と銃を共鳴させ、エネルギーを溜め始めた。
スマッシュは立ち上がり攻撃から避けようとしていた。
「逃がさないよ！」
銃口からエネルギー弾が打ち出されると、そのままスマッシュに直撃し、爆散した。
U電王はデンガッシャー・ロッドモードを振り回し、ガーディアン達を薙ぎ倒していた。何体か近づいて来たが、U電王は片手間の如く脚で蹴り返す。続いてスマッシュも現れ、U電王に攻撃をする。
「タコねぇ。釣りがいはあるけど、好みじゃないんだよね！」
スマッシュは鞭状の腕を振り降ろすが、U電王はロッドを巧みに操り攻撃をかわしていく。一方で、距離を詰めロッドで攻撃するも、スマッシュの柔軟な身体により攻撃が弾かれてしまった。
「なら、タコらしく釣られてもらおうか！」
一度距離を空け、スマッシュに向けてロッドから釣糸を飛ばした。それはスマッシュの身体に巻き付いた。

「ふんっ」
U電王がロッドを振り上げると、スマッシュも弧を描くように空中へ飛びあがり、その勢いのまま地面に叩きつけられた。
フルチャージ！
スマッシュが立ち上がった所をU電王はロッドを投げつけた。スマッシュの身体に青いオーラが現れ身動きを止めた。
「でぇやあああああああ!!」
身動きを止めたスマッシュにU電王は跳び蹴りをした。
蹴りはスマッシュの身体を突き抜け、スマッシュは爆散した。
W電王は手に持つデンガッシャー・ブーメランモードをガーディアンに投げつけ、もう一方の手に持ったハンドアックスモードで切り刻む。ブーメランは次々とガーディアン達を切りつけ爆散させていた。上空からスマッシュが飛んできて、W電王に攻撃を仕掛けようとした。
「甘い！」
W電王は飛んできたスマッシュの攻撃をかわすと同時に蹴りを叩き込んだ。スマッシュは地面に墜落した。
「同じ鳥ならば、もっと優雅で美しく立ち振舞わなければな。」
そう言いながら、W電王はスマッシュの攻撃を華麗にかわしていた。そして、両手に持ったブーメランとハンドアックスで美しい軌跡を残しながらスマッシュを切り刻んでいく。
「このような、ごちゃごちゃした戦いは好きではない。すぐに片を付けよう！」
フルチャージ！
W電王は再びブーメランをスマッシュへ投げつけた。スマッシュはそれを避けたが、ブーメランは弧を描いて戻り、スマッシュの背中に一撃を与えた。同時にW電王はハンドアックスも投げつけて一撃を与えるとすれ違い様に武器を両手に収めた。それぞれの攻撃をその身に受けたスマッシュは爆散した。
４人の電王がそれぞれスマッシュを倒した時、幾つもの火球が彼らを襲った。

火球の方向を見ると他のスマッシュとは違い、身体の黒いスマッシュが迫っていた。
「真打ち登場ということか。」
W電王は言った。
「今までのスマッシュとは違うかも。」
U電王は言いながら構えを取った。それに倣い、それぞれの電王も構える。
再びスマッシュが火球を放つ。U電王とK電王がそれをかわし距離を詰めると、それぞれの武器で攻撃をした。
「あれ？」
「何!?」
スマッシュの強固な身体に攻撃が全く通じなかった。そして近距離から火球を浴びてしまった。
「今度は僕の番！」
R電王はスマッシュに銃弾を浴びせるが、スマッシュは一切怯むことなく、さらに火球を飛ばしてきた。R電王はかわしながら攻撃をするも、徐々に防戦一方となっていった。
横からW電王が両手の武器で瞬く間もなく攻撃を繰り返すが、それでもスマッシュはW電王を払いのけ、火球を浴びせた。
「ああ!?鳥さんが焼き鳥になっちゃう！」
R電王が言った。
「縁起でもないことを言うな、田分けが！」
「でも、これはちょっとヤバいかも…。」
強固な身体と火球を前に、４人の電王達は苦戦を強いられていた。
その時だった。
フォーーーーーーーーーーン
空中からデンライナーの汽笛が聞こえてきた。
「何や!?」
K電王が空を見上げると、デンライナーが現れ４人の電王の前に停まった。そして中から、イマジン達に取って見覚えのある青年が降りてきた。

「みんな！」
「「「良太郎!!!」」」
かつてイマジン達と契約し、電王となり協力しながら戦ってきた青年・野上良太郎だった。
「良太郎!?どうしてここへ？」
Ｕ電王が尋ねた。
「オーナーから事情を聞いたんだ。僕も手伝うよ！」
良太郎が答えた。
「ええ所にやって来たな、良太郎！」
「わーい、良太郎、久しぶり！」
「これは、我が恩人！」
それぞれの電王も良太郎との再会に喜んだ。
「あれ？モモタロスは？」
「あぁ。センパイならこの上。幸太郎や他のライダー達と一緒に戦ってるよ。」
Ｕ電王が答えた。
「そっか…。じゃあ、ここで頑張らないとだね！」
そう言うと、良太郎はベルトを腰に巻き付けた。
「変身！」
良太郎の身体を黒いスーツが包み込んだ。その後、赤い携帯電話のようなデバイスを取り付けると、上空から大きな剣が現れた。それを受け取るとライダーパスを剣に装填した。
ライナーフォーム！
黒いスーツにデンライナーを模したアーマーが装着し、新たな電王の姿に変わった。
「みんな、行くよ！」
５人の電王がスマッシュに立ち向かった。
Ｗ電王が両手の武器を投げ、Ｒ電王が銃をスマッシュに撃ち牽制した。それでもスマッシュは火球を放つがＵ電王とＫ電王が各々の武器でそれを弾き返し、すれ違い様に切りつける。
「えい！」

一瞬バランスを崩したスマッシュに向け、ライナー電王がデンカメン・ソードで切りつける。立て続けの攻撃を受けたためか、スマッシュはライナー電王の攻撃に怯んだ。しかし、スマッシュは体勢を戻すと火球を放った。

「わわわ!」

ライナー電王は咄嗟にデンカメン・ソードで火球を防ぐと同時にソードについているレバーを引いた。

デンカメンの位置が電王になると、刀身に赤いオーラが纏った。

「それ!」

赤いオーラを纏った剣でスマッシュを切りつけると、ついにスマッシュは地面に膝をついた。

「今だ、みんな!」

ライナー電王の合図で各々最後の一撃のために構えた。

フルチャージ!

チャージ・アンド・アップ!

U電王はロッドをスマッシュに投げつけ身動きを止めた。続いて、K電王とW電王がそれぞれの武器にオーラを纏わせ切りつけた。そして、R電王のエネルギー弾が続けて撃ち込まれ、U電王の跳び蹴りがスマッシュに直撃した。

「電車切り!」

ライナー電王の足元にレールが敷かれると、それに沿うようにデンライナーのオーラが現れ、オーラを纏ったライナー電王はスマッシュ目掛けて最後の一撃を与えた。

5人の電王の必殺技を受けたスマッシュはついに爆散した。

「ふぅ…。」

ライナー電王が一息つくと、ベルトから赤いデバイスが消え、良太郎の姿に戻った。

「あ、モモタロスが僕たちを呼んでる!またね、良太郎!」

リュウタロスが言うと、上空へ飛んでいった。

「どうやら、あっちの方も佳境のようだな。さらばだ、我が恩人よ!」

ジークも続いて行った。

「じゃあな、良太郎！待っとれモモの字！」
キンタロスも上空へ行った。
「後は僕たちに任せて、またね良太郎！」
最後にウラタロスが上空へ消えていった。
「頼んだよ、モモタロス。みんな。」
良太郎は消えていった空を見上げた。
その顔は彼らを信頼するように笑顔だった。

エピローグ
破壊と創造

光寫眞館。
光栄次郎と孫娘・光夏海の二人で経営している写真館だ。
フィルムから写真を現像するという、今となっては大層レトロな所だが、その懐かしさが良いのか客足が途絶えることはない。
また、写真館だけあって、結婚祝い、七五三、入学祝い等で利用する客も少なくない。
むしろ、ある青年のお陰で客足は伸びていた。
「ありがとうございました。また、後日写真を受け取りにいらして下さい。」
夏海は幼稚園の入園祝いで撮影に来た家族の対応をしていた。
「こちらこそ、良い写真を取ってもらいました。ありがとうございます。」
父親が答えた。
「ねー、ねー、パパ。あそこみてみたいな。」
男の子がある方向を指さして言った。
「あの、よろしいですか?」
「ええ、もちろんいいですよ。」
夏海は笑顔で答えた。
「わーい、おねえちゃんありがと!」
男の子も嬉しそうにしていた。
「良かったわねぇ。」
母親と手を繋ぎながら、ある部屋へ入って行った。
〔仮面騎士館〕
部屋には、表の写真とは毛色の違う写真が飾られていた。
「わぁー!かっこいいー!」
男の子は顔を輝かせていた。
「お、いらっしゃい!」

中で写真の手入れをしていた男性が声をかけた。
男の子の目に映る写真。
それは、門矢士が撮影した仮面ライダーの写真だ。
「おにいちゃん、これなんだかわかるの？」
男の子が男性に聞いた。
「もちろんさ！この仮面ライダーは…クウガだよ。」
「くうが？かっこいいね！」
「そうだろ？何たって、このお兄ちゃんが変身するんだからな！」
男性は得意気に言った。
「え!?」
男の子は驚いていた。
「ユウスケ君!?」
夏海は思わず声を出した。
「…。なんちゃって。へへ。」
小野寺ユウスケは茶化して笑った。
「なんだぁ…。」
男の子は不機嫌な顔になってしまった。
「で、でも！実はお兄ちゃん、クウガに助けてもらったんだ！」
「ほんと？」
「あぁ！何事も一生懸命頑張ると、必ず応援しに来てくれるんだ！君も良い子にして頑張ったら、きっと会いに来てくれるよ！」
「わかった、ぼくがんばる！」
男の子に再び笑顔が戻った。それを見たユウスケは親指を立てサインを送った。
「またねー、おにいちゃん、おねえちゃん！」
男の子を連れて家族は店を後にした。
「もぅ、ユウスケ君ったら！」
夏海は頬を膨らませていた。
「ごめんごめん、夏海ちゃん！つい…。」
ユウスケは言った。
「…でも、上手に男の子に言えましたね。」

「俺の言葉で笑顔を無くされちゃ、ライダーやってる意味がないからね。」
小野寺ユウスケは仮面ライダークウガである。
士達が訪れた”クウガの世界”で出会い、それから士達の旅に同行していた。一通りの旅を終えたので、元の世界に帰れるはずだが、世界の人々の笑顔を守りたいという信念から、ずっと一緒に旅を続けている。
「さあさあ、今のお客さんが今日で最後だから、お茶でもしよう。」
栄次郎は珈琲と紅茶を持ってきた。
「やーっと、ワタシも羽を伸ばせるわ～」
小さな白いコウモリのようなモンスター・キバーラも表に出てきた。
間もなくすると、店のドアが開き、門矢士と海東大樹が入ってきた。
「じいさん、この写真を頼む。」
士はぶっきらぼうに言うと、トイカメラを栄次郎に渡した。
「はいはい。さて、どんな写真が撮れたのかねぇ。」
栄次郎も快く受け取り、早速現像作業に取り掛かった。
「おかえりなさい、士君、海東さん。」
「ただいま、なつみかん。」
「珈琲、頂くよ。」
士と海東はそれぞれ席についた。
「二人一緒に帰ってくるなんて、珍しいね。」
ユウスケが言うと、
「たまたまだ。」
「たまたまさ。」
二人とも否定するように答えた。
「あー、はいはい。」
ユウスケも席に座って紅茶を口にした。
士にとって、ここは特別な場所だった。
ライダーの世界を旅する時には決まってここから始めていた。かつて大ショッカーの大首領として、また世界の破壊者として夏海達と

対峙することもあったが、それでも最後には温かく迎え入れてくれた。士にとって彼女達はかけがえのない仲間なのだ。
一人で旅を始めてからも、度々ここへ戻る。それくらい士にとって居心地の良い所なのだ。
もちろん、士自身の生まれ育った世界もある。妹の小夜にも、たまに顔を出すこともある。しかし、ディケイドとしての始まりの場所は、やはり光寫眞館なのである。
「ほら、出来たぞ出来たぞ。」
栄次郎が皆の前に士が撮影した写真を広げた。
「どれどれ…。」
ユウスケは写真をまじまじと見た。
「士君、幸太郎さん達と会ったんですね。」
夏海は幸太郎達の写真を見つけて言った。
「まぁな。野上良太郎には会えなかったが。」
それでも、彼らと共闘できたことは、士にとって悪くはなかった。
「これって、新しいライダーか？」
ユウスケは石動美空と仮面ライダービルドが写っている写真を見て言った。
「あぁ。仮面ライダービルド。創る、形成するという意味のビルド、らしい。」
「へぇ、仮面ライダービルドかぁ。どんなライダーなんだ？」
ユウスケは興味津々で士に尋ねた。
士は、ビルドの世界での出来事を夏海達に話した。
「…。そんなことがあったんですね。」
夏海は、かつて自身の世界で起こったことを思い出しながら聞いていた。
「ラブ＆ピースか…。一緒に戦ってみたかったな。」
「ユウスケと気が合うかもな。」
士はフッと笑いながら言った。
「しかし、破壊のディケイドに創造のビルド。一見すれば、まさに水と油のよう。相まみえることはないと思うけど…。」

海東が言った。
「何が言いたいんだ、海東。」
士は海東を睨みながら言った。
「それでも、破壊によって生まれるものもある。この旅で良いものを見させてもらったよ。」
海東から思いがけない言葉が出たことに、一同は驚いた。
「お前、頭でも打ったか？」
士は敢えて尋ねてみた。
「冗談はよしたまえ、士。僕はいつも通りさ。」
そういうと、海東はズボンのポケットからあるものを取り出した。
「なんだこれ？」
ユウスケは蜘蛛の意匠のある小瓶のようなものを見て言った。
「海東、お前…！」
それは、アシッド・ハンターが使っていたスパイダーフルボトルだった。
「残念ながらあの世界から離れた途端、その成分は抜け落ちてしまったよ。ただの空っぽさ。」
海東は続けて言った。
「ただ、このボトルがいつかまた何かを引き起こすかもしれない。」
「どういうことですか？」
夏海が尋ねた。
「…。さあね？」
海東はしらを切っていたが、何かを知っているようだった。
「そうだ！久しぶりに皆集まったんだ、記念写真を撮ろう。」
栄次郎は思い付いたように言い、撮影の準備を始めた。
「さてさて、背景は…。とと！」
栄次郎は躓いてしまい、スタジオの背景を下ろす紐にしがみついた。
すると、それはある様子を描いた背景へと変わった。
「これは…。」

世界の破壊者・ディケイド

数々の世界を巡り、その瞳に新たに映すものとは…。

時の守護者

デンライナーに戻った野上幸太郎、桜井侑斗、モモタロスは目の前にいる青年に驚きを隠せなかった。
「じいち…」
「野が…」
「りょおたろおおおおおおおおおお!!!!」
誰よりも先に野上良太郎に飛び付いたのは、モモタロスだった。
「ちょ、モモタロス、痛いよ…。」
良太郎は痛がりながらも、モモタロスと会えて笑顔がこぼれていた。
「久しぶり。幸太郎、侑斗。」
「野上。」
仏頂面だった侑斗からも笑顔がこぼれていた。
「じいちゃん、でも、どうして??」
幸太郎は良太郎に尋ねた。
「私が呼びました。」
車内のドアが開き、オーナーが現れた。
「オーナーが?」
幸太郎が聞き返した。
オーナーは、過去改変によるタイムパラドクスを特に警戒している。逆を言えば、それに関係することでなければ無闇に介入等をするような人物ではなかった。
それ故に、オーナー自らが良太郎を呼び出したとはどういうことなのか。幸太郎は疑問に感じたのだ。
「そうなんだ。オーナーから力を貸して欲しいって。」
良太郎が答えた。
「さて…。時のライダーが揃った所で本題に入りましょうか。」
オーナーが突然話し始めた。
「突然のことで申し訳ないのですが…。あなた方がこうして集まったのは、何も偶然ではないのです。」

「どういうことだ？」
侑斗が尋ねた。
「仮面ライダービルドの世界が、我々が望んだものとは違う結果には成りましたが、どうにかライダーの世界線から弾かれることはなくなりました。」
「ビルド…。幸太郎達が一緒に戦った仮面ライダーだね。」
良太郎が確認した。
「ビルドの世界がライダー世界線に紡がれたことで、新たにライダーの物語が始まりました。」
「しかし、それによって、また厄介な連中が活動を開始し始めたのです。」
「厄介な連中…。」
幸太郎が呟いた。
「あの…。」
良太郎が口を開いた。
「ライダーの世界って、そんなに続いてるの？」
「「「え。」」」
良太郎の思わぬ一言に、一同は声を漏らした。
「良太郎…。マジか。」
モモタロスが言った。
「僕が知っているだけでも…。確か、キバとディケイドはわかるけど…。」
「じゃあ、オーズは？」
幸太郎が尋ねた。
「おうず？」
全くピンときていないようだった。
「そういえば、俺たちがデンライナーで何度か異なるライダーの世界を訪れたけど、その時はじいちゃんが一緒にいることってあんまりなかったね。」
幸太郎が言った。
「うぅ…、ごめん、みんな…。」

良太郎は俯いてしまった。
「俺とデネブは、仮面ライダードライブの世界に行ったことがある。」
侑斗が言った。
「僕達も、仮面ライダーフォーゼって言うライダーが活躍した世界にも行ったよねぇ。」
ウラタロスが言った。
「さっきも言ったけど、俺とテディは仮面ライダーオーズの世界に。」
「うん。」
幸太郎も言った。
「俺なんか、たくさん会ったぜぇ！W、ウィザード、エグゼイド！」
モモタロスが言った。
「おや？モモタロス君、君はウィザードとエグゼイドに会ったことないはずですが…？」
オーナーがモモタロスに言った。
「あん？…。そういや、会ったことないか？じゃあ何で知ってるんだ？」
モモタロスは自問自答し始めた。
「夢の見すぎじゃないの？センパイ？」
「なんだと、エロ亀!!」
モモタロスとウラタロスは喧嘩を始めた。
「そんなにいるんだ…。知らなかったよ…。」
良太郎は自分が知らない内に多くのライダーが活躍していることを知り、無知な自分に落胆した。
「…。ごほん。」
オーナーは咳払いをして、皆の注目を集めた。
「えー、本題に戻りましょうか。」
「先ほど申し上げた厄介な存在。〝タイムジャッカー〟と呼ばれる者達です。」
「タイムジャッカー？」
一同には聞き覚えのない言葉だった。
「ええ。目的は不明ですが、我々が最も恐れている、過去改変を行って

いる連中です。それもライダーの世界線限定で。」
　オーナーが言った。
「何!?」
　侑斗が声を上げた。
「すでに、いくつかのライダー世界は彼らの介入により、ライダーの存在は消されてしまい、ライダー世界線の本流から弾かれつつあります。」
「そんな!?」
「…で、あるからして、我々、時の運行を守る者として、何としてでも事件の早期解決をしなければならないのです。」
「じゃあ、じいちゃんを呼んだって言うのは?」
　幸太郎は察しがついた。
「つまり、そういうことです。」
「世界の守護者ともいえるライダー達がタイムジャッカーの策略により存在が消されているとなると、我々としても安易に行動を移す訳にもいきません。」
「そこで、時間変動の影響を受けないあなた方に協力をお願いしたいのです。」
　デンライナーの中は静かな時間が流れた。
「…。わかったよ。」
　良太郎が口を開いた。
「たくさんの人たちが困っているなら、助けてあげなくちゃ!」
　良太郎の眼差しはいつになく力のあるものだった。
「せっかく取り戻した世界を、消させるもんか!」
　侑斗も言った。
「やろう!じいちゃん、侑斗さん!」
　幸太郎も強く頷いた。
「おいおい、俺たちも忘れちゃいねぇだろうな!」
　モモタロス達も立ち上がった。
「モモタロス。改めて聞くよ?」
　良太郎はモモタロスに言った。

「僕と、最後まで一緒に戦ってくれる？」
「その望み、答えるまでもねぇぜ！」
「では、次の目的地に…。」
「「「しゅっぱーーーーーっ!!!!!」」」
時の列車・デンライナー
新たに向かう先は、過去か、未来か…。

もう一つの新世界

街は大分賑やかさを取り戻していた。
相変わらず、スカイウォールの残骸やパンドラ・タワーはその凄惨さを表すかのように佇んではいる。
タワーはともかく、スカイウォールの残骸に関しては撤去のしようがないのだろう。
時折、スマッシュの出現とそれに合わせてガーディアンが交戦しているが、その数も少なくなりつつある。
なぜなら、各地方に仮面ライダーがいるからだ。
それは徐々に国全体に認知し始めており、ライダー達も窮屈なく活動に専念しているようだ。
石動美空は、カフェ・ｎａｓｃｉｔａの屋上で復興しつつある街並みを眺めていた。
仮面ライダービルド復活以降、ここで街や空、海を眺めることが好きになっていた。特別何があった訳ではない。ただ、好きなものを好きなだけ眺められる幸福感に浸りたかった。
「美空ー。そろそろ戻ってこっち手伝えー。」
「はーい。」
店から父・石動惣一の声が聞こえ、美空は店の手伝いに戻った。
ここも随分賑やかになってきた。海辺に佇んでいることや、惣一が一つ一つ丁寧に焙煎した珈琲が好評となり、今では客足が絶えることはない。
その中でも一人、美空の目につく客がいた。
「また来たの？」
美空は男性客に声をかけた。
「別にいいだろ、他に行く宛がねぇんだよ。」
男性客は答えると珈琲を口にした。
「うまっ、やっぱここの珈琲美味いな。」
「…。ふふっ」
美空は思わず笑ってしまった。

「あん？何だよ。」
男性客は少し恥ずかしそうにしていた。
「ううん、お口にあって良かったですわ。」
美空はわざとらしくいった。
すると、二人の女性客が男性客に近づいてきた。
「あの…。もしかして、格闘家の長瀬リュウガさんですよね？」
「私達、ファンなんです！握手してもらってもいいですか？」
「あ、あぁ。いいぜ！」
リュウガが二人の女性客と握手を交わすと彼女達から黄色い声援が聞こえた。
美空はそれを見ると、そのまま店の仕事を続けた。
長瀬リュウガ。彼女達は知らないが、彼は東都の仮面ライダー、クローズである。
リュウガはかつての万丈龍我と同じく格闘家となっていた。ライダーとしての経験を生かしたファイトスタイルが売りなようで、格闘技番組でも時折出演する程、人気を集めていた。
そんな彼は、オフの時にｎａｓｃｉｔａに現れる。本人曰く、何故だか分からんが何だか落ち着く。だそうだ。
そして、ここに訪れるのは何も彼だけじゃなかった。
「みぃいぃいたぁん!!!!」
店のドアから奇声と共に男性が入ってきた。
「ぐ…！れないさん!?」
「グレてねぇよ♪紅カズミ、かずみんって呼んでいいんだぜ♪？」
そう言うのは、北都の仮面ライダー、グリスこと、紅カズミだ。
彼は、かつて猿渡一海が経営していた猿渡ファームをそのまま引き継ぎ、”猿渡ファーム・紅ｖｅｒ．”として農業を再開している。新政府が掲げる新政策の一つである”北都土壌再生計画”によって、スカイウォールのせいで死にかけていた土壌は回復し、農家として再開出来るようになったそうだ。
カズミの手腕もさることながら、そこで採れる野菜はとても美味しく、首都圏を中心として全国の６割の家庭や飲食店に出回る程であ

る。ここｎａｓｃｉｔａも例外ではなく、というかカズミの贔屓もあって、かなりの安値で野菜を出荷してくれるのである。そして、その度にカズミも訪れるのだ。最も、それは美空に会いたいという大きな理由がある訳だが。
「お？何だ、お前も来たのかよ、かずみん。」
　リユウガがカズミに言った。
「あ？何でてめぇがいるんだよ。てか、お前がかずみんって呼ぶんじゃねぇ！」
「あ？別にいいだろ？」
「は？ダメに決まってんだろ？」
「あ〝？」
「あ〝ん？」
　リユウガとカズミは互いの額をぶつけ、メンチを切り始めた。
　二人は会うとだいたいこうなる。もはや犬猿の中といっても過言ではないだろう。
「ちょっと、二人ともやめてよ！」
　見かねた美空が言った。
「はい、やめます！」
　カズミはあっさりと止めた。
「全く…。紅さんも、珈琲飲んでいって。」
「あざます！」
　カズミは美空の言うことには素直に聞き入れる。
　呆れるが、それでも美空は悪い気はしなかった。
「邪魔するぞ。」
　新たに髭を生やした男性とメガネを掛けた男性が店のドアをくぐってきた。
「お。よぉ、ヒゲ。」
「ん？何だ、ポテトもいたのか。」
「あんたは、サイボーグ鷲尾！」
「誰がサイボーグだ。」
　カズミとリユウガの挨拶に二人はそれぞれ答えた。

「あ。ゲントクさん、いらっしゃい！鷲尾さんも!?」
美空はさらに二人分珈琲を用意した。
魅上ゲントクと鷲尾ナリアキ。新政府の仮面ライダー、ローグと西都のライダー、マッドローグである。
初めはローグが西都のライダーであったが、ゲントクが政府に参加したため、その代わりをナリアキに託したそうだ。
ゲントクは政府に参加すると、その手腕を発揮し国を建て直す為の政策を多く発案した。もちろん、北都土壌再生計画もその一つである。そのため、カズミは彼と交遊を深めていたのだ。今では、次期首相とも言われている程である。
「鷲尾さんが来るなんて。」
美空は少し驚いた。
「ど、どうも…。」
緊張気味なのか、ナリアキは俯きがちだった。
「西都の方で戦ってた時に、たまたま共闘してな。その時に声をかけたんだ。」
ゲントクが答えた。
「てか、ヒゲのおっさんもここ来るんだな。」
リュウガが言った。
「たまにだがな。ここに来ると気が落ち着くというか…。おっさん言うな！」
「え？そう、なんですか？」
美空は聞き返してしまった。
「まだ３０過ぎたばかりだ。」
ゲントクが答えた。
「そこじゃなくて！ここに来る理由！」
「何？…あぁ。何故かここを懐かしく感じてしまってな。迷惑だったら申し訳ない。」
ゲントクが言った。
「ヒゲもか？俺もそうなんだよなぁ。」
「俺も。」

カズミとリュウガも同意した。
もしかして、生前の彼らの記憶が…？
美空は自分の考えが邪推なことは自覚していた。しかし、もしかしたらと思っていた。
すると、また店のドアをくぐってある男性が入ってきた。
別れ際、もう会わないと誓ったはずの男がそこにいた。
「え!?」
そこにいたのは、佐藤太郎もとい葛城巧だった。
「なんで、ここへ？もう会わないって…。」
しかし、なんだか巧の様子がおかしかった。
「み…。」
「え？」
「み、みみ…、見つけたあああああああ!!!」
巧は突然叫びだした。すると巧は美空の両肩を掴んだ。
「ひゃっ」
突然のことで、美空には何がなんだか分からなかった。
「おい、葛城!!俺のみーたんに何触ってんだ!!」
カズミが美空の肩から巧の腕を離させた。
「いや、お前のじゃないだろ。」
リュウガが冷静に言った。
「葛城？俺は葛城先生じゃねぇ！」
その一言に、美空は引っ掛かった。
「え、どういうこと？」
「俺は、ツナ義ーズの佐藤太郎だ!!」
巧の口から、思いがけない一言が飛んできた。
ツナ義ーズの佐藤太郎。それは、新世界からこの世界に連れ出し、葛城巧の人格に書き換えられ消滅したはず。現に、葛城巧として仮面ライダービルドになり戦っていた。
「そんなはずは…。だって、ビルドとして戦ってたのは…。」
美空が言うと、
「ん？葛城先生だよ。」

佐藤太郎を名乗る巧は言った。
「あ？でも、そのビルドはお前だよな？」
リュウガも尋ねた。
「あぁ、この俺。佐藤太郎だ。」
わけが分からなかった。
「…？あ、ああ！わかった。先生、お願いしやす!!」
太郎はビルドドライバーを腰に巻いた。
「…、最悪だ…。」
太郎は呟いた。しかし、それは先ほどとまるで様子が違っていた。
「石動美空…。」
「葛城、巧？」
「…Ｅｘａｃｔｌｙ」
それは間違いなく、葛城巧の口調だった。
「何が起こってんだ？」
カズミが言った。
「僕は、本来なら消えるはずの存在。それが、今は佐藤太郎の身体を借りて現存している。」
巧が言った。
「だけど、やはり僕は身体を借りてる身。佐藤太郎の人格を消そうだなんて理不尽なことはできない。」
「だから、ビルドとして活動するとき以外は佐藤太郎に任せることにしたんだ。」
「マジかよ…。」
巧の説明を聞いて、リュウガは思わず呟いた。
「ちなみに人格の入れ替えは、ビルドドライバーがトリガーになっている。」
言われてみれば、あの時葛城巧としてビルドに変身する時や別れ際の時はベルトをしたままだった。
「それって、もし太郎がベルト手放したらどうすんだ？」
リュウガが尋ねた。
「その心配はない。彼が寝ている間に、絶対手放さないように睡眠学

習させてある。」
　巧の一言で全員背筋が凍る思いをした。
「まさかの催眠かよ…。」
「さらっととんでもないことしてやがる。」
「まさに悪魔の科学者。」
「マッドですね。」
「しかし、去り際にあれだけ言っておいてこんな形で再会するとは…。」
　巧はばつが悪そうにしていた。
「なら、何故ここに来た。」
　ゲントクが尋ねた。
「それは…。」
　巧は言葉を詰まらせたが、続けて答えた。
「佐藤太郎が、会いたがっていたから。やむを得ず…。」
「え？」
　美空は聞き返した。
「…。これ以上はやつに直接聞いてくれ！」
　巧はそう言うと、ベルトを外した。
　その途端、またしてもテンションの高い太郎の人格に変わった。
「美空、ちゃん？だよな！あんたのおかげで、俺はバンドマンかつ仮面ライダーという最強のジョブを得た！その感謝をしたかったんだ！」
　太郎は満面の笑みを浮かべながら言った。
「おい、俺のみーたんの名を気安く呼ぶな！」
　すかさずカズミが言った。
「だから、お前のじゃねぇよ。」
　同じくリュウガも言った。
「あ、あー…。」
　前に佐藤太郎が豪語していたことを思い出した。
「それと、あの時の約束、ちゃんと果たせよな！」
「約束？」
　それを聞いて、美空はふと思い出した。

「焼き肉のこと？」
　美空は尋ねた。
「ったりめぇよ！ツナ義ーズから引き抜いた分だけ、ちゃんと食わせろよ！」
　太郎は言った。
「だったら、今日は皆で肉食いに行くかぁ？」
　カウンターの方から石動惣一が言った。
「お父さん!?」
　美空は驚いた。
「いいですね、お義父さん!!」
　カズミは顔を輝かせて言ったが、
「お前の親父になった覚えはねぇ！」
　すかさず惣一から喝がとんだ。
「いいんじゃねぇの？こうやって、みんな顔合わせることだってないだろうしさ！」
　リュウガは乗り気だった。
「まぁ、皆でテーブルを囲むのも悪くないか。」
　ゲントクも同意した。
「も、もしよろしければ、私も同席したい。」
　ナリアキも伏目がちだが、その気であった。
「じゃあ、いつものやつ行きますか！」
「夜はー。」
　その時、外から爆発音と共に叫び声が聞こえてきた。
「スマッシュか、いくぞ！」
「やき…、ええ!?タイミング悪すぎっしょ!!」
　カズミの合図で、太郎、リュウガ、ゲントク、ナリアキは店の外へ出ていった。
「巧のやつ、ああは言っていたけど、ほんとはあいつもお前に会いたかったんじゃないか？」
　皆を見送った後、惣一が美空に言った。
「…。どうだか。」

美空はそう言ったが、微笑んでいた。
「さっさと終わらせて焼き肉いくぜ、みんな！先生、お願いします！」
太郎はベルトを装着した。
「結局お前が引っ張るんじゃねぇのかよ。」
リュウガも続いてベルトを装着した。
「何だか、こういうのも懐かしく思うな。」
「フッ、そうだな。」
「こういうのも、悪くないんですね。」
カズミ、ゲントク、ナリアキも二人に倣った。
「「「「変身!!!!」」」」
掛け声と共に、５人はそれぞれの仮面ライダーに姿を変えた。
「僕達は、仮面ライダー。愛と平和、ラブ＆ピースのために戦う戦士だ！以後お見知り置きを。」

国が復興していく中、ネオファウストが活動を始めた。
平和になった国の危機に、東都・北都・西都の仮面ライダー達が立ち向かう！

全く…。
せっかくの休日。
最近大ヒットしてるという、パンクバンド・ツナ義ーズ。
彼らが風都コンサートホールでライブをすると聞き、俺とフィリップ、亜樹子の分のライブチケットを買ったってのによ。
どこの誰かは知らんが、ドーパントになって暴れてくれたお陰で、ライブが台無しになっちまった。
ドーパント故に、俺達、仮面ライダーＷが黙って見てる訳にも行かないから戦った訳だが。
ドーパントの男に聞くと、彼は元々バンドマンとして活動していたらしいが、中々軌道に乗れずそのまま解散してしまったそうだ。プライドも高いため、自身の音楽よりも売れているバンドに嫉妬心を抱いていたそうだ。
独りよがりも甚だしいが、気持ちがわからんでもなかった。ただ、だからといってガイアメモリに手を出すのは論外だ。
その後、男は風都警察の御用となった。
しかし、しかしだ…。
ライブチケット代が戻ってこない!!
１枚８０００円もし、私費は降りんと亜樹子の一点ばりのせいで３人分をポケットマネーで払う羽目になった。
故に、最後まで観られなかったことが、ひじょーに腹立たしかった。
お陰で気分は最悪。
街の為にドーパントを倒したとはいえ、何とも言えないもやもやが心の中に残ってしまった。
「何を恐い顔をしているんだい？」
相棒のフィリップが声をかけてきた。
「あん？何でもねーよ。」
と言ったものの、おそらく不機嫌さが顔に出てただろう。

「さしずめ、ライブチケットの払い戻しが無いことに凹んでいるんだね。」
　フィリップはニヤっと笑って言った。
「うるせぇ…、うるせぇ！高かったんだぞ、チケット代!!俺のなけなしの金で買ったってのによ!!もう最悪だ…。」
「まぁまぁ翔太郎くん。珈琲飲んで落ち着いて。」
　亜樹子はそう言うと珈琲を差し出した。
「ん、サンキュー…。」
　珈琲を口にしたとたん、余りのマズさに吹き出してしまった。
「まっず!!おい、亜樹子!!いい加減、我流で淹れるのマジでやめろ!!」
「えー、うそぉ？…うぇ。」
　亜樹子も不味そうな顔をして言った。
「おっかしいなぁ。最近、隣街に出掛けた時に見つけたカフェ・ｎａｓｃｉｔａで飲んだ珈琲が美味しくて、豆買ってきたんだけどなぁ。」
「豆の問題じゃねぇよ。」
　俺は事務所のど真ん中に置かれたとんちんかんなコーヒーメーカーを差して言った。
「でも、お陰で元気が出たじゃないか。」
　フィリップが言った。
「これを元気とは言わねぇよ。」
　俺は呆れて言った。
「そう言えば、その隣街の方でマスカレイドの目撃情報があったらしい。」
　フィリップが言った。
「マスカレイド？」
　風都以外でのドーパント。ミュージアムが絡んでいないとしたら…。俺は嫌な予感がした。
「まさか、財団Ｘか？」
「確証はないけど、おそらくはそうだろうね。」
　財団Ｘ。俺達を含め数々のライダー達の前に立ちはだかる謎の組織。相変わらず何が目的なのか見当がつかない。

「何を企んでいるのやら。」
「けど、僕たちが街を離れる訳にはいかない。気にはなるけど、どうすることも出来ないさ。」
「まぁな。」
ガタッ
事務所のドアが開いた。
「よぉ、翔太郎。何だか浮かない顔をしてんな。」
風都警察署の刃野幹夫、ジンさんが訪れた。
「ジンさん聞いてくださいよぉ。」
俺はツナ義ーズの事を話した。
「なるほどなぁ。ドンマイだな。ハハハ！」
「それで、何か依頼ですか？」
フィリップがジンさんに尋ねた。
「ん、それなんだがな…。」
このジンさんが持ち込んできた事件。
これがまさか、あの時の悪夢が再来するとは誰も予想してなかったんだ。

新作予告
「仮面ライダーW&ドライブ　Eの復活／ライダー捜査線」
近日更新予定